

---

# 傭兵の代行者

七菝 剛亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傭兵の代行者

### 【Nコード】

N8081X

### 【作者名】

七菝 剛亜

### 【あらすじ】

親バカな魔物四人に育てられたラギウス。

16歳の誕生日を迎えた朝、彼は初めての一人旅にでる。

目指すは徒歩二日の近所の街！

そこで冒険者ギルドに登録して帰るだけ……のはずだったのだが、  
そう簡単には帰れそうになく……。

主人公は最強ではありませんが、親バカ四人のせいでチート気味。

まだ予定段階ですがバトル、ギャグ、軽いハーレム要素ありのファンタジーになります。  
読んで頂けたら幸いです。

## 始まりの朝

夢を見る。それも毎回同じ夢を。

訓練に疲れて、泥のように眠る時なんかいつもそうだ。

物心がついた頃には既に見るようになっていた、馴染み深く、それでいて馴れる事の無い夢。

目が覚めると、どんな夢だったのか思い出せない。

だからきつと、馴れる事なんて無いんだと思う。

ああ、またか。

そんな風に溜め息を吐いて、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔を腕で乱暴に拭う。

その度に、いつ部屋に入ったのか、母さんが俺を抱きしめてくれる。

どうして俺が夢を見たのを知ってるのかはわからない。

母親の勘だというけど、実の母親じゃないのに分かるものなのだろうか？

いや、それ以前に、母さんは種族的に子供が作れないはずだ。

もしかしたら自分が知らないだけで、寝ている間に悲鳴でもあげているのかも知れない。

うわ、なんて迷惑な奴なんだ。

こんなんで一人旅なんてできるのか？

そんな事を考えながら、俺、ラギウス・ベルカントは16歳の誕生日の朝を迎えた。

## 第一話

服を着替えて部屋を出る。

幾つもの部屋の扉がある廊下を左に進み、階段を降りると、マスターが作ったのであろう朝食の匂いに腹がなる。

いい歳して、さつきまで母さんに抱きついていたくせに現金なもんだなあ、と苦笑してしまう。

階段を降りたそこは広い食堂兼酒場になっており、6人が座れるテーブルが6つ並んでいる。

知らない人が見れば、何処からどう見ても宿屋か酒場にしか見えないだろう。

「おはよう、ラギ」

「おはようございます」

「おう、起きたか」

その一角、カウンターの出入り口に近い、いつも食事の時に使うテーブルに母さん、先生、師匠が座っていた。

「おはよう母さん、先生、師匠」

朝の挨拶をしていつもの席に座る。

見ればテーブルには既に手付かずの朝食……サラダやスープが並び、三人ともお茶が半分以上減っている。

待たせてしまったかなとは思うが、口にするのは止めておいた。些細な事だが、わざわざ気を使わせる必要はない。

それよりも、

「なんか居づらい」

皆して俺を見るのは止めてもらいたい。

俺の左隣では母さん……二十代半ば程にしか見えない、思わず目を奪われるような大きな胸を持ち、赤い薄手のドレスを纏った美しいサキュバス、エリアーデが腰まである長い紫色の髪を弄りながらにっこりこと。

正面では先生……俺の少し上くらいの年頃にしか見えない、青白くて眼鏡をした金髪の美しい青年、リッチのナハトがクスッと。

右斜め前では師匠……三十代半ば程の四角い顔に無精髭を生やし、額に赤い鉢巻きをしたガタイの良い赤髪の男、人狼のヴォルフガンクがにやにやと。

それぞれが笑みを浮かべながら俺の事を見ている。

……毎年の事だけど、どうにも対応に困る。

「いいじゃない、お誕生日なんだから。ほ~~~~っんと、子供が育つのもって早いわねえ」

そうやって俺に抱きついて頬擦りしてくる母さん。  
因みに頬擦りはいつもの事である。  
あと乳首つまむな。

「エリアーデの言う通りです。保護者である我々が祝いたい以上、ラギに拒否権はありません」

「ああ、ガキンちょは素直に喜んできゃあ良いんだよ」

「別に喜んでない訳じゃなけどさ」

乳首をつまむ母さんの手を払いつつ、抱き返しながらぼやく。  
もちろん嬉しい。嬉しいのだから、どうにも気恥ずかしい。  
なんとというか、このままだと一生子扱いされそうな気がする。

「はいはいはい、皆さん揃ったなら食事にしますぞ」

そう言ってカウンターの中からマスター……白髪をオールバックに固め、白いシャツに黒のベストを着たダンディーな、それでいて好好爺然とした微笑みを浮かべる白い口髭の老人が、両手に料理が



乗った大皿を持って出てきた。

因みにマスターの種族と名前は俺も知らない。

まあ一番古い記憶……十年以上前のマスターと顔が全く変わっていないので、たぶん人間ではないと思う。

「ラギさんももう16歳なんですから、いつまでも子供扱いでは可哀想ですよ」

そう言ってマスターは、テーブルの真ん中に2つの大皿を置いた。

片方はソースで艶々と輝くチキンの丸焼き。

そしてもう片方は……、

「……………」

「やだ、可愛い……ッ！」

「ほう、これはなかなか」

「……………ジジイ、どの口で子供扱いは可哀想なんてほざきやがった」

二頭身にデフォルメされた俺の絵が描かれた大きなケーキ。  
さらに絵の下の方には、

「」「ラギきゅん、お誕生日おめでとう……！」」「」「」

と、書かれていた……というか、師匠以外の三人に言われた。

「それじゃあ、そろそろかしら……あむ」

皆で乾杯してマスターの料理を堪能した後、デザートとして目の前に差し出された大きなケーキを頬張っていると、ふいに母さんが切り出し、唇の端に付いていたクリームを舐めとられた。

まあ、これもいつもの事だ。

「……いつもながら引くぜ」

「いまさらですが少しは子離れしなさい」

「おやラギさん、まだクリームが付いておりますぞっじゅるり……  
どれ、私も」

「」「」「やめんかクソジジイ！！」「」「」

……………さて。

今さらだが、この世界では魔物と人間が共存しているのかといえば、そんな事は無い。

むしろ完全に敵対関係にあるという方が正しいだろう。

他の大陸の事までは知らないが、少なくとも俺達が住んでいるパルギア大陸ではそうだ。この大陸には国が四つあるが、どの国でも魔物は討伐対象とされている。

では何故か、と問われたら、わからないとしか答えられない。

わかっているのは、幼い頃に捨てられたらしい俺は、変わり者の四人に拾われ、16歳になる今日まで育てられてきたという事。

母さんには母親の愛情や温もり、魔法とは少し違う妖術や呪いの技術を与えられた。

先生には魔法の使い方と言葉、計算や学問を教えられた。

師匠には体術や武器の扱い、旅の技術を叩き込まれた。

じ…マスターには料理や作法、文化や様々な知識を教授された。

あとは四人が傭兵として仕事を請け負っているらしいという事くらいだ。

そして俺は傭兵稼業を手伝う許しを得る為に、今日から旅に出る。

…まあ旅といっても、片道二日の街に行っただけで冒険者ギルドに登録してやるだけだが。

これは師匠の提案で、冒険者ギルドに登録しておけば色々と便利

らしいし、一人旅で見聞を広げる事を意図しての事らしい。

最初は四人とも普通の仕事に就いて欲しいと思っていたようなのだが、俺が何年もかけて説得した。

たまに仕事に行く家族を見送って、不安な中帰りを待つのはもう御免なのだ。待つくらいなら一緒に戦いたい。

そんな訳で今日から俺は旅に出る。この誕生日会の後すぐに出発だ。……本当は去年の予定だったけど、母さんが駄々をこねたから一年遅くなっただけだな。

「……………では、まず私からすな」

一撃で岩をも砕く三人の拳でボコボコにされたマスターが、ベストの内側から茶色の布袋を取り出し、その中から四つの白い置物を出してテーブルに並べる。

「どうぞ、手に取ってみてください」

「これは？」

手を伸ばして置物の一つを掴む。チェスの駒と同じくらいの大きさだろうか？

固いけど軽く、円柱状の根元の部分以外は蝙蝠の翼を生やした女性の形に造られて……いや、この形は一つだけで、よく見れば他の

はそれぞれ狼、ローブを纏った骸骨、人間の形のようなだ。

「代行者の神像と呼ばれるものです。それぞれに我々の力が宿っていて、危険な時や困った時、そして日常に至るまで、ラギさんを助けるでしょう。一応オリハルコン並に固いので壊れる心配もありません。ちなみに落としたり捨てたりしても必ず戻ってくるし、盗んだ人間は必ず謎の変死を遂げるというアフターサービス付きですよ」

……後半だけ聞くと、それは下手したら呪われていると言っているのではなからうか？

「さらに就寝時には目を光らせて周囲を徘徊か……もとい警戒し、奇声や呪いの言葉で不審者を威嚇しつつ抹殺してくれますぞ！」

「まんま呪われてんじゃねえか！」

「さらにさらに！一人旅でさみしい時はお話相手にもなってくれませぞ！定期的に話し掛けないと血の涙を流しながら泣き叫んだり寝てる間に縛られてじっと見詰め続けたりしますがね！！」

「引っ込めジジイ！！」

とりあえずマスターの顔に全力で叩きつけてみた。

あ、あと母さんにペンダントとか師匠に剣とか先生に軽装鎧一式とか貰った。特に呪われているような物も無かった。

やっぱり普通のプレゼントが一番だ。

「はあああゝ、行っちゃったわねえ……」

テーブルに突っ伏したエリアーデは盛大な溜め息を吐き、テーブルをガタガタと揺する。

街に無事に着くだろうか？怪我をしないだろうか？風邪を引かないだろうか？ご飯を自分で作れるだろうか？ちゃんと一人で寝て一人で起きられるだろうか？朝抱き締めてあげないで大丈夫だろうか？お小遣いはもう一年分ぐらい渡した方が良かっただろうか？男や女に襲われたりしないだろうか？避妊は大丈夫だろうか？やっぱりこっそり後を……

「落ち着きなさいエリアーデ、お茶がこぼれます。ちゃんと神像も装備も渡したし、ネフロなら片道二日です。何も無ければ、街で觀光をしたとしても一週間もあれば帰ってきますよ」

全く親バカなんだから。

そう言つて、ナハトは優雅にお茶を飲む。  
だいたい神像を持たせた時点でもう何でもなるのだ。心配する必要はない。

「そんなのわかつてますう〜〜、母親が息子を心配するのは当たり前なんですう〜〜、男には愛する息子を想つ母親の気持ちなんか解らないんですう〜〜っだ。それもこれもヴォルフのバカが余計なこと考えたのがいけないのよ」

余計な事。

それは一人旅の事はもちろん、一般人でも知っているような常識や知識の一部を意図的に教えない事だ。将来の事を考えて、自分で調べる事や情報を集める事の大切さを教えるというのだが、エリアーデは断固として反対した。

情報も知識も自分達が教えれば良い。どの道ラギー一人で戦場に送り出したりなんてさせる気はない。

そう主張するエリアーデを他の三人が宥めすかしてなんとか了承させたが、やはり今でも納得できない。

「大体ね、何も無ければって、本当に何も無いと思うわけ!？」

鉄や鋼より数段硬いハルベンド鋼で補強されたテーブルをバンバン叩いて壊しかけているエリアーデの問い掛けにナハトが苦笑する。

「もちろん思つてませんよ?きつと大変な事になるでしょうね」

あの子の事だ、きつととんでもない事に巻き込まれるだろう……  
ましてや決戦迷宮なんですからね、と心の中で付け足す。

「それでも神像が有れば大丈夫ですよ。……きっと驚くでしょうねえ」

驚愕するラギの顔を想像して、ナハトがクククツと黒い笑みを漏らす。

「ふんっ、全部あのバカが………あれ？二人は何処に行ったのよ？」

「二人なら森の出口までこっそりつけてくるって、さっき出て行きましたよ？」

「……あの駄犬とクソジジイ……ッ！抜け駆けしやがったわね！」

ナハトは扉を粉碎して飛び出して行くエリアーデの騒々しさに眉をしかめ、溜め息を漏らす。

「まったく、ここには親バカしか居ないんですか」

そういつて懐から掌大の水晶玉を取り出して、僅かに魔力を込めてじっと凝視すると、水晶に森の中を歩くラギウスの姿がうつる。

「わざわざ行かなくても、こうすればどの角度からだって見守れるの」

水晶玉越しに生徒兼息子を見詰め、優しく微笑むナハト。



やはりここには親バカしかいないのだった。

## 第二話

「今日も良い天気だねえ」

雲一つない青空を見上げ、んーっとなびをする。皆に見送られる中、森の中にある家を出て早一日。

特にハブニングもなく、森を抜けて街道を歩き、順調に進んだ所で日が暮れたので野宿をして、朝になったら干し肉やパンで簡単に朝食を済ませた。

いつもの夢を見る事もなく、例の神像が本当に目を光らせて周囲を見張ってくれたのでゆっくり休む事が出来たのだ。

………近くに白目を剥いて泡を吹くゴブリンの死体を見た時は本気でビビったけど。

最初は呪われてるんじゃないかと思ったけど、もしかしたら本当に凄い物なんじゃないだろうか？

正直にいえば初めての一人旅に不安があつたし、野宿の時はろくに眠れないんじゃないかと思ってたから凄くありがたい。

試しに布袋に入れずに歩いてみると、俺の前後左右を囲むように空中に浮き、そのまま一定の距離を維持して俺の歩く速度に合わせて動いてくれる。護衛という事なのだろう。

「うーん、なんて頼もしいんだ」

もう一人旅とは言えないような気もするが。

一つ一つ形が違うし、名前を付けるべきだろうか？

そういえばマスターがそれぞれの力が宿ってるって言ってたし、皆を呼ぶように呼べば良いか。

そんな感じでたまに頬擦り(?)してくる神像を撫でてやったりしながら街道を歩く。

その異変に気付いたのは、可愛い奴等め!と両肩に四体の神像を乗せて撫でながら歩いている時の事だった。

「人の声…?」

一瞬空耳かと思ったが、どうやらそうじゃないらしい。

周囲を見回せば街道の周りは平原が広がり、少し離れた所に林があるのみだ。

「あそこか」

俺は街道を逸れ、林の中へと走る。

こちらの意思を汲み取ってくれたのか、師匠の神像が声が出たと思われる方向へ先行し、他の神像達は走る俺の周りを旋回する。

「シャアアアアアッ！」

甲高い耳障りな奇声と硬いもの同士がぶつかり合う金属音。

どうやら間に合ったらしいと判断した俺は、木の影に隠れて様子を窺う。

「くっ、この……！」

林の中、少し開けた場所にいたのは、五匹のゴブリンと戦う小柄な少女だった。

素早い動きで囲まれないように戦ってはいるが、牽制しつつ囲もうとするゴブリン……ボロボロの布切れを腰に巻いてナイフを持った灰色の醜い魔物を相手に攻めあぐねている。

肩と胸、肘や膝やだけを守るプロテクターとナイフという身軽な装備。そしてゴブリンの足下に弓と矢の束が入った矢筒が落ちているのを見るに、普段は距離をとって戦うのが主体で接近戦は苦手なのだろう。

「どっしたもんかな……」

ゴブリン程度ならどうとでもなるが、彼女が何者なのかわからない。極端な話、盗賊の類이었다らゴブリンを倒して助けた途端に後ろから刺されるかもしれない。

様子を見るべきだろうか？

そう考えた俺は少女の動きを観察するが、少女の顔が見えた瞬

間に硬直する。

めっちゃくちゃ可愛い。

うわ！うわ！うわ！どうしょ！やべえよ可愛いよ！

母さんで美人には見慣れてるつもりだったけど、母さんとは全くタイプが違う美少女だ。

「うっし！」

もう盗賊とか関係ねえや。

そうと決まれば急いで助けねば。

美少女は世界の宝です。

「母さんとマスターはあの娘を、先生と師匠は俺の援護を！」

剣を腰のベルトに固定した鞘から抜き払い、神像達に指示を出しながら、少女に集中して俺に気づかないゴブリンに向かって走り出す。

走る俺の足音に振り返ったゴブリンの首を、横風ぎの一撃で切り飛ばす。

骨すら大した手応えも無く切り飛ばした剣の切れ味に、俺は思わず目を見開く。

師匠が昔使っていたという剣……銘は確か、マーシエニクス。飾り気の無い、ごく普通の剣に見えるようにしたというそれは、

今までの訓練に使ったどの剣よりも手にしっくりくる。

いきなり現れて仲間の首をはねた俺に動揺するゴ布林達。

マーシエニクスを大きく振りかぶり、近くにいた一匹を脳天から真つ二つに斬り裂く。

「マーシエニクス！！」

離れた位置にいるゴ布林に向けて振るうと同時に放ったそれは、  
師匠に教わった剣の名前にして魔法の言葉。

使い手の望む形状に一瞬で変化するという千貌の剣。  
数十もの刃が連なる事で構成された、鞭のようにうねりしなり、  
何処までも延び、進路上の全てを貫きズタズタに引き裂く連接蛇腹  
剣。

それはゴブリンの心臓を貫き、俺の手首と腕の動きに従ってゴブ  
リンの全身を瞬時にスライスする。

凄え、凄えよ師匠！

訓練で使っていた剣よりも桁違いに扱い易い！

神像といい、この剣といい、本当に俺みたいな未熟者が貰って良  
かったのだろうか？

……いや、逆に言えば、まだまだそれだけ未熟で不安という事か。  
いいさ、装備に頼りきらず、もっともっと強くなってみせるさ！

三匹を片付けた俺は、残る二匹のゴブリンに目を向ける。

「キシヤアアアッ！」

「ギ、ギギイイ、キシヤア！」

耳障りな奇声をあげるゴブリン。

一匹は恐れをなして背を向けて逃げ出し、一匹は呆然とする少女に襲い掛かる。

「危ない！」

「……………っ!？」

少女がゴブリンに気付くが、遅い！

間に合うか!？

連接蛇腹剣を振りながらそう思った瞬間、俺の刃がゴブリンに届くより早く、ゴブリンのナイフが少女に届くよりなお早く。

マスターの神像がナイフに飛来し、ナイフをゴブリンの手ごとグシャリと粉碎する。

「……………!？」

そしてゴブリンが悲鳴をあげる前に、母さんの神像の目が妖しい光を放ち、強烈な衝撃波でゴブリンを吹き飛ばす。

ゴブリンは全身の骨を砕かれ、吹き飛ばされた先で木に叩きつけられて哀れな肉塊と化した。

……………これ絶対俺より強いよなあ。

ふと最後の一匹が逃げた方向を見れば、先生と師匠の神像が戻ってくるのが見える。

きつと俺の不始末を処理してくれたのだろう。

ヤバい。便利とかそんなレベルじゃない。

これはちよつと本気で頑張らないと、強くなるチャンスまで奪われてしまう。

「……………マーシエニクス」

そんな事を考えながら、俺はマーシエニクスを普通の剣の状態に戻すのだった。

「助けてくれて、本当にありがとうございました!」

しばらく呆然としていたが、事態がようやく理解できたらしい少



女が何度とペコペコと頭を下げる。

こうして近くで見れば、大きめの瞳と幼さが残る輪郭が小動物的で、ぎゅ〜と抱き締めたくなるような少女だ。

小柄で細いが不健康な印象は無く、むしろしなやかで張りの有る四肢は猫科のそれを彷彿とさせる。

肩口で揃えた藍色の髪も活動的な印象の少女によく似合っていると思う。

そしてなにより、上半身は半袖の服にプロテクターを装備しているのだが、下半身はデニム生地 of 短いズボンにブーツと膝当てを装備しているだけなので、形の良い白い太股が丸見えなので非常に目の毒だじゅるり。

いかん、マジで洒落にならんくらい可愛いぞ。

「僕、ヒースって言います。ここにはギルドの依頼で薬の材料を取りに来たんですけど、気付いたら囲まれちゃって……本当にありがとうございました!」

「いや、偶然通り掛かっただけだし、そんな大袈裟にしないでくれ」

正直な話、むさい男だったら助けなかったかもしれないし。

「いいえ、お兄さんがいなかったらどうなった事か……あの、もし良かったお名前を教えてくださいッ!」

「ラギウスだ。ヒースはこの辺りに住んでるのか？ネフロに行きたいんだが、どっちに行けば良いかな？」

林の中を走ってゴブリンと戦ったせいで、方向がさっぱり分からん。

「ネフロに行くんですか？それなら僕もネフロのギルドに帰る所だし、一緒に行きませんか？」

「ヒースはネフロに住んでるのか？じゃあ道案内を頼んでも良いかな？」

「はい、任せてください！」

そう言ってヒースはにっこりと花が咲くような笑顔で胸を張る。

……うん、ペったんこな胸も全体のバランスを考えると問題無さそうだ。

### 第三話（前書き）

誤字脱字がありましたら教えて頂けると幸いです。  
なお、文章力の欠如は仕様ですぞ。

### 第三話

「それじゃあ冒険者ギルドはまだ未登録なんですか？」

「ああ、それどころか一人旅も初めてなんだ」

ヒースを助けて数時間、ときおり休憩を挟みつつ、俺達はお互いの事を話しながらネフロへ通じる街道を歩いていた。

たまに商人の馬車や、他の冒険者や旅人とすれ違うが、あまり警戒した様子がないのを見るに、この辺りは治安が良いのかもしれない。

ちなみにヒースは俺と同年で、まだ駆け出しの探索者らしい。

この世界には迷宮と呼ばれる謎のダンジョンがある。

何のために誰が作ったのかは不明だが、その中には魔物が徘徊していたり罠が設置されていたりするが、その奥には宝が眠っているという。そんな迷宮や遺跡での探索を中心に活動しているのが探索者だ。

といっても探索者だって旅をして普通にギルドなんかで依頼を受けるし、冒険者だって迷宮や遺跡に入るんだから、俺から見れば同じようなもんだが。まあ求められるスキルが少し違うのだろう。

ヒースが教えてくれたのだが冒険者ギルドは国営らしく、無料で

所属・登録できるらしい。

冒険者ギルドは魔物討伐や素材調達、商人や旅人の護衛等が依頼の中心なのだが、その一方で探索者には迷宮や遺跡内の探索や罠の解除等も依頼される。

新しく発見された迷宮は危険な罠が多く、ギルドの要請で集まった一流の探索者達による調査隊の後で他の探索者や冒険者が入るのが一般的だという。もちろん調査隊より先に入っても問題ないが、ほとんど自殺行為とみなされているそうだ。

もちろん新しい迷宮がそこらじゅうで簡単に見つかる訳じゃないし、一流の探索者ばかりじゃないので、探索者も普段は冒険者と同じ様な依頼を受けているんだとか。

「ネフロの近くにも迷宮って有るのか？」

街の近くに有るなら探索もし尽されているだろうし、軽く中の雰囲気を見ていくのも良いかもしれないしな。

「有りますよ、街の中に」

「……………街の中？」

怪訝な顔をしていたのか、俺の顔を見てヒースがクスツと笑う。

「ネフロの街に有るのは決戦迷宮って呼ばれてる迷宮なんです」

決戦、迷宮？

「また物騒な名前だな。普通の迷宮とどう違うんだ？」

「決戦迷宮ってというのは、昔、戦の神カドルを中心、神々が邪神達と戦ったってという伝説があるんです。だから決戦迷宮って名前がついたんです」

ヒースの説明によるとこうだ。

大昔、今の信仰されている神々と対立する悪しき神々との戦いがあり、その最終決戦が行われたのがネフロにある決戦迷宮らしい。

他の迷宮との違いは、全階層がただっ広いホール状の空間になっており、階層毎に全く違う環境で、例えば、雪が降り積もり吹雪が吹き荒ぶ階層かと思えば、一つ下は灼熱の砂漠のような階層だったりして、各階層で全く違う魔物が出現する事。

そんな事もあって、この決戦迷宮は各階層が違う空間に繋がっているんじゃないかと言われている。

そしてこの迷宮が街の中にある理由は二つ。

一つは罠が少ないので多くの冒険者が自分の力を試す為と、迷宮の奥に眠るといふ宝を求めて訪れ、その冒険者を目当てに商人達が集まって自然と街になったのだ。

そしてもう一つは、ネフロ自体が防壁としての役割を成している事。

通常、迷宮から魔物が出てくる事は無い。

しかし街ができて以来、この決戦迷宮では二百年の間に強力な魔

物が三回も這い出しているのだという。

一回目と二回目は魔物の大群を率いて現れ、そして四十年前の三回目は強大な魔物が一匹で現れたらしい。

今では過去の教訓を生かし、国中に魔物が散らばらないよう、ネフロ内部で包囲殲滅できるように防壁や防衛隊が配備されているわけだ。

……もつとも、二回目も三回目も街は壊滅的な被害を受けたらしい。しかも一回目と二回目は魔物の首魁を、三回目はその一匹すらも倒せずに取り逃がしたというのだから困ったものだ。

そしてその魔物による蹂躪ぶりから、迷宮から魔物が現れるのを『侵攻』と呼ぶらしい。

「いつそ封印して塞いじまえば良いのに」

「そんな事したら、街が潰れちゃいますよ」

俺の事に苦笑したヒースが、あ！と声をあげ、前を指差す。

「見えてきました、あれがネフロです」

ヒースが指差した先、そこには確かに高い外壁に覆われた街、通称、迷宮都市ネフロがあった。

迷宮都市ネフロは上から見ると大きな円と小さい円、そして極小の出っ張りで形成された巨大な瓢箪ひょうたんのような形をしている。

迷宮の入口は瓢箪の口の部分にあり、小さい円の方からしか入れず、街の出入り口は瓢箪の下の大きな円の部分の東西南の三ヶ所にある。

、それぞれに門番や警備兵の詰め所もあつて不審者が出入りしないか常に見張りがいるが、街の規模も大きく迷宮も有るので人通りが凄まじく多い。その為よつぽど怪しい素振りを見せない限り、簡単なチエック等だけで半ばフリーパス状態だ。

そんなんで大丈夫かとも思うが、ネフロには腕利きの冒険者や大勢の警備兵兼防衛隊がいるし、暴れたりして街の中にいる商人達を敵にまわせば大変な事になるらしく、治安は安定しているらしい。

俺はチエックを待つ行列に並びながら外壁を見る。

高さは25メートルくらいだろうか？ 高さはもちろん、分厚くて外壁の上には何人もの見張りの兵士が配置されている。

俺は頭の中で部屋に飾つてあつた地図を思い浮かべた。

少し離れてはいるが、ネフロから北に向かえば隣国のザブツベルクとの国境がある。迷宮からの侵攻に備えているという事だが、実際には有事の際の拠点としても想定されているのだらう。中々に防衛力が高そうだ。



ちなみに極小の出っ張り、瓢箪の口にあたる迷宮の入口の周囲の防壁は高さは30メートル、厚さ10メートルもある大防壁だ。

「……街の作りを把握しておいて損は無さそうだな。」

将来傭兵になるなら、攻める側か守る側かは別として、また来る事になるかもしれない。

「はい？」

「いや、腹減ったなあって言ったただけだ。おっ、もう次だぞ」

まあ楽しく観光でもさせてもらおうとしようか。

「凄いなこりゃ」

何が凄いつて人口密度が半端ねえ。

道には石畳が敷かれ、そして道の真ん中を空けるように食べ物や道具を売る屋台や露店商がズラ〜〜と並んでいる。

両親の間で手を引かれて目を輝かせる小さな子供、値段交渉をする貴族か商人風の身なりの良い男、ベンチに座って何かを話している冒険者達、楽器を鳴らす吟遊詩人や大道芸と小銭を投げる見物客達。

まるでお祭り騒ぎだな。気を付けないと、うっかりはぐれてしま  
いそうだ。

大きな街に来るのは初めてだが、他の街もこんなに賑やかなのだ  
らうか？というか、此処はいつもこうなのだろうか？

今なら師匠が一人旅をさせようとした理由がわかる。いくら口で  
人が沢山いると言われても、これを見なかったらピンと来なかった  
だろう。

自分がどれだけ世間知らずなのか思い知らされるな。

「王都と同じくらい大きな街ですからね。人も物と沢山集まるんで  
す」

「家と家の周りの森しか見た事がない人間には衝撃的だな」

ヒースには俺が母さん達四人に拾われて育てられた事は話してある。  
流石に育ての親が四人とも魔物とは教えていないが。あ、あと神像  
は布袋に仕舞ってある。俺にはあの神像の価値がわからないし、無  
意味に目立つ必要は無いだろう。

「これからどうしますか？ギルド、宿屋、食事……何処から行きま  
すか？」

「ヒースはギルドの依頼を受けてたんだろ？俺も登録したいし、ち  
ょうど良いから案内してくれるか？」

「わかりました、じゃあギルドに行きましょう」

これだけ広くて人が多いと簡単に迷いそうだな。迷子にならないようにしないと。

「おっと悪い！」

ギルドに向かっていている最中、ヒースに色々聞いてあっちこっちをキョロキョロしていたからか、正面から来た男とぶつかってしまった。

「大丈夫ですか？」

「ああ、なんでもない」

ぶつかった相手も行ってしまったし、もう少し気を付けよう。

「しかし凄い人通りだな、いつもこういうのか？」

「いえ、いつもはここまで多くないんですが……僕もここに来て一ヶ月くらいだから知らないけど、何かあるのかもかもしれませんね」

なるほど、普段より多いのか。

物は多そうだが、普段からこれだったら寄り付かなくなってたか  
もしれ「ぎゃあああああ!？」

「悲鳴!？」

「近いな……行ってみるか」

にわかにはざわつき始めた人混みをかき分け、俺とヒースは悲鳴がした方へ走り出す。

程無く悲鳴が上がったと思しき人集りに着き、周りが遠巻きに眺めているものを視認する。

男だ。特に出血しているようには見えないが、うつ伏せで倒れてピクリともしない。

「見えますか？」

「ああ、男が倒れてるな……ん？」

「……………?」

背が低くて見えないのだろう、懸命に爪先立ちしているヒースに説明していて気付く。

あれは……さっきぶつかった男じゃないか？

いや、よく見ていた訳じゃないから確信は無いが。

「皆さんさがって、さがってください!」

騒ぎを聞き付けたのであろう、三人組の警備兵が人垣をかき分けて倒れた男に近づく。

簡素な鎧と剣で武装した二人の男が周囲の人間に声をかけ、倒れた男から離れさせる。

残った一人、なんとも場違いな白と黒の修道服に、頭にはベールを被ったシスターが倒れた男の首筋や手首に触れている。

シスターは近づいた二人の男と何かを話すと、悲しげに小さく首を振る……おそらく手遅れだったのだろう。

「……………」

ふいに周囲を見回しだしたシスター。

その視線がこちらで止まる。

……………いや、こちらではない。

俺が自意識過剰でないなら、俺のことを真っ直ぐに見つめている。その視線が、何故かひどく居心地が悪い。

「ラギウスさん？どうしたんですか？」

「……………いや、別に。死んでるみたいだし、そろそろ行くっ」

言い知れぬ不快感を振り払うように、俺達は足早にその場を離れるのだった。

#### 第四話（前書き）

気付かれもせず呪い殺された哀れなスリの男に合掌。  
（人）チーン

## 第四話

「また無駄に広いな」

建物がデカイのは外から見ても分かったけどデカ過ぎたる。三百人は入るぞ。

「僕も最初は驚きましたよ。でも混むときはここが一杯になるんですよ?」

マジか、全く想像できん。

周囲を見てみれば、ギルドに入ってすぐに案内所と書かれた受付があり、そこを左側に行くと登録や依頼の受諾・完了報告等を行う受付窓口と待ち合い席が、右側に行けば食堂を兼ねた休憩所がある。中はどちらも結構な人がいるし、広さに驚いたこと以外はヒースに聞いていた通りだ。

「僕は報告窓口に行つてきます。登録窓口は一番奥にありますよ」

「そっか、ありがとう。じゃあ行つてくるわ」

ヒースに礼を言って別れると、奥に向かう。

もっと荒れてるのを予想していたけど、中は清潔で職員も見た感

じじっかりしている。

まあ座っている冒険者達は含めないでの話だが。

一番奥の登録窓口はっと……………ああ、あれか。

「すみません、登録はここで良かったですか？」

「ええ、こちらで承りますよ。どうぞお掛けください」

そう言っただけ目付きの鋭い、いかにも『私仕事できます』って感じの、凛とした金髪の美人なお姉さんが微笑んで対応してくれた。

母さんで美人への免疫がなくてなかったら、一目惚れくらいしてたかもしれない。

しかしまだ若いみたいなのに堂々としていて、なんとも風格がある。微笑んでいてこれなんだから、睨まれたらかなり怖そうだ。

よし、髪が長いわりに額には一房の髪が垂らされてるだけで、額のほとんどが丸見えなのでデコ姐ねえさんと呼ぼう。心の中で。あん？本人に言える訳ないだろ。絶対殺される。

デコ姐さんは読んでいた書類を横に置くと、もう一枚他の書類と羽ペンを取り出して俺の前に差し出す。

「ではこちらの書類にご記入をお願いします」



書類には名前、年齢、出身地の記入欄、他国のギルドに所属済みのチェック項目、冒険者か探索者かのチェック項目、戦士か魔法使いかの項目、戦士なら魔法が使えるかどうかのチェック項目等々、その後も幾つかの項目が並んでいる。

俺は出身地以外の記入欄と項目に書き込み、書類をデコ姐さんに手渡す。

「拝見いたします……ラギウス……ベルカント様？」

「はい」

「……………失礼ですが、本名ですか？」

怖っ！なんでいきなり睨まれてんの！？

「本名ですけど……………なにか？」

「……………いえ、失礼致しました。私、当ギルドの副長を務めております、リーリエ・ハインガスト・バズワルドと申します」

どうぞリーリエとお呼びください、そう言って差し出された手を握る。

重い物など持った事も無さそうな細くしなやかな手は、見た目とは裏腹に力強く、修行で出来たのだろう固い剣だこの感触を返す。

しっかしこの若さで副長って、俺より少し上くらいにしか見えんのだが。しかもえらく御大層な名前を……もしかして貴族か？

うん。正直な話、あんまり貴族には良い印象がない。

別に何かされたって訳じゃなくて、先生や師匠による教育の影響な訳だが。

「それでは当、冒険者ギルドの説明をさせて頂きませんが、先にいくつかの確認をさせて頂きます。まず、出身地の欄が無記入なのは……？」

「すみません、出身地なんですけど、育ての親に拾われて森ん中の家で育てられたので……」

「森の中ですか。失礼ですが、どの辺りになりますか？」

「ここから南東に二日くらいです」

実際には一日半くらいで着いたが、まあ初めての一人旅で少しペースが早かったしな。

「……南東に二日くらいの森ですか？」

「はい」

「……そうですね」

なんで一々ピタツと止まったり、こつちをジツと睨むんだよデレ」  
姐さん……。

「わかりました。それでは他国のギルドには所属しておらず、冒険者、戦士で魔法が使えるという事ですが、信仰の方は？」

「信仰？いえ、別に」

信仰とかギルドに関係あるのか？

特定の神を信仰してたらダメとか、依頼人から指定でもされたりするのだろうか？

「…特に信仰は無いと？」

「はい」

「でも魔法は使えると？」

「はあ」

でもって何だ。魔法と信仰なんて関係無いだろ。

まるで俺が嘘ついてるみたいじゃねえか。

「失礼ですが、魔法はどなたに教わりましたか？先ほどの育ての親にあたる方から？その方も信仰はしていませんか？」

「……それが登録と何か関係あるんスか？」

だから何なんだよ本当に。

人ん家の事なんてどうでも良いだろ。それとも赤の他人のくせに、先生の教えにケチつける気か？

「……いえ、申し訳ありません。大変失礼いたしました」

あっさり引き下がって謝るくらいなら最初から聞くなよ。そつ口に出さなかつた事を我ながら褒めてやりたいね。

「………それではギルドの説明をさせて頂きます」

「連れがいるんで手短にお願いします」

「………はい、申し訳ありません」

『本当にごめんなさい』みたいなしよぼくれた顔を止めてもらいたいもんだ。

まるで俺が悪いみたいじゃねえか。

その後は特に何もなく（話が弾むはずもなく）、デコがギルドの説明をし、俺が無愛想に返事をするという光景がしばらく続く事になる。

粗方ヒースに聞いていた通りで、大きく違う点は無い。

その中で聞いていなかった事が二つ。

一つはギルド内でのランクの事。

ギルドではランクという制度があり、冒険者は登録した直後はF〜SSSのFランクと評価される。

そこから依頼をこなす事でランクが上がるのだが、各ランクは一つ上の、つまりFならEランクの依頼までしか受けられないらしい。当たり前だが、ランクが高いほど難易度や危険性が高く、報酬も高くなる。

ランクを上げたければ、依頼を受けて達成していけばギルドの判断でランクが上がるといふ。早い話が、依頼を沢山受けてれば自動的にランクが上がるって訳だ。

そしてもう一つ。むしろこっちが問題だ。

ギルドに所属する者は有事の際、滞在している街のギルドからの要請があった場合は戦闘に参加しなくてはならない、という点だ

相手が魔物だろうと人間だろうと、要請が有れば断る事は許されないらしい。

……傭兵としてはお話にならないんじゃないか？

師匠は何を考えてギルドに所属するように言ったのだろう？

何か考えが有つての事なんだろうが……まあ除名依頼を出せば  
そついった義務も無くなる訳だが。

「以上が当ギルドの説明になりますが、何かご質問は？」

「特には」

「それでは、これにて説明と登録手続きは終了となるのですが、最後に試験の説明をさせて頂きます」

「試験？」

なんだそりや、聞いてないぞ？

「新規登録という事なので、冒険者として最低限の戦闘能力の持ち主かどうかだけ確認させていただく試験です。Fランクの中から簡単な依頼をギルド職員と共に受けて頂きます。もちろん試験でも報酬は出るのでご安心ください」

なるほど、言われてみれば納得だ。

一番簡単なランクもクリア出来ないようでは無駄死にするのがオチだろう。

「試験は早くて明日の午前からとなりますが、如何なさいますか？」

明日からか……まあ今日は宿も探さないといけないし、むしろ好都合だろう。

「じゃあ明日の午前でお願いします」

「わかりました。では明日の午前中なら何時でも構いませんので、もう一度この登録窓口までお越しください」

そう言ってデロは俺の書類に何かを書き込む。

「……では、登録手続きはこれにて終了となります。明日の試験に備えて今日はゆっくりお休みになってください。本日はお疲れ様でした、明日のお越しをお待ちしております」

リーリエは遠ざかる少年の背中をじっと見詰め、見えなくなると

書類に目を落とす。

「……何者なのでしょうね」

つぶやいて書類の名前の欄を指でなぞり、先ほどの少年の顔を思い出す。

ベルカント。

その名を聞いて連想するものなど、大陸中の人間に訊いても一つしかない。

『ベルカントの傭兵隊』

ベルカントという名前の意味も、所属する人数も不明。戦場に現れるのは常に一人。

青年、中年、老人と若い女の中から誰か一人が現れる。

故に四人ではないかと言われているが、実際は不明。

しかしその実力は大陸中の誰もが知っている戦場の伝説、実在するおとぎ話だ。

突如出現した数万の魔物を一夜にして殲滅した青年。

生け贄を要求する魔神を殺した中年の男。

大地の神によって封印されていた巨大なドラゴンを葬った老人。



神々の中で最も強いといわれる戦の神の求愛にNoと言い、その軍勢を退けた女。

何かしらの神から力を授かった代行者ではないかと語る者もいるが、代行者ならば神でも殺せなかったドラゴンや戦の神の軍勢に勝てる筈がない。

そして一時は実在を疑われた事も有ったが、それには彼等を見たという者が多過ぎた。

そんなベルカントの名を名乗り、南東の魔物が住み着いた森から来たという少年。

しかも神へ信仰も無しに魔法が使えるというのだから無茶苦茶だ。

この世界の人間でそんな話は聞いた事がないし、魔法を使う知性のある魔物ですら、何かしらの神や魔神を信仰している。

そんな真似が出来る者がいるとすれば、それこそ神か魔神くらいだ。

正直に言えば、嘘なのではないかと思った。イタズラにしても馬鹿馬鹿し過ぎる。

だが彼の持つ剣と鎧とペンダントが、その考えを許さなかった。

一言で言ってしまうば、あれは呪いだ。間違いなく呪われた装備だ。それもかなり凶悪な。

にも関わらず、少年は平然としている。呪われた物を三つも装備

しているのに。

「呪いの内容がわからないのが痛いですね」

戦闘中にしか発動しない類いの、例えば狂戦士化や生命力の吸収、もしくは普段から身体能力を低下させるような物の可能性もあるが、三つともその類いの物なんて事があるだろうか？

その可能性は、あまりにも低いように思える。

「試験は私が同行できるようにしなければ」

登録手続きに試験があるのが天の采配のようにすら思えた。彼が何者なのか、その一片くらいは分かるかもしれない。

迂闊にも初対面の印象を悪くしてしまった。明日は細心の注意を払う必要がある。

もし彼がベルカントの傭兵隊と関係が有るなら、事はこの街の、否、この国の存亡にすら関わりかねない。

場合によっては南東の森に関しても調べた方が良さそうだ。

ふと、リーリエは自分が興奮し、胸の高鳴りを抑えられないのに気付く。

期待と不安と喜び。

まるで初めて剣を持って魔物と対峙した時のようだ。

はて、と首を傾げる。

期待と不安はわかるが、喜びは何なのだろうか？

この興奮は何なのだろうか？

しばし考えて、ああ、と納得する。

「これが、憧れの存在に触れる気持ちですか」

つまり私は、ベルカントの傭兵隊を通して、ある意味彼に恋をしたという事ですか。

武骨者の私が、幼い頃に聞いたおとぎ話の英雄に恋をしたなどと、両親が知ったらどうなるでしょうね。

苦笑は一瞬。

後に残ったのは歓喜の笑みだった。

#### 第四話（後書き）

主人公は初対面の相手や敬語を使うべき時には使える子です。

ただし親以外とは接した事がないので、あまり人付き合いが上手い訳でもないし、親バカに育てられたので少し短気な所も。

こうゆうのはちゃんとプロフィールや登場人物紹介のページを作るべきか……ふむ。

編集の仕方もちゃんと見なきゃ。

## 第五話（前書き）

風邪で寝込んでしまい、更新遅れました……申し訳ない。

## 第五話

「あー、ありましたねえ試験とか…」

「いやいやいや、ほんの少し前の事だろ」

お茶を飲みながら、ヒースが遠くを見るような目になって吐息と共に言葉を漏らす。

登録手続きを終えた俺は、待ち合い席で待っていたヒースと合流し、そのままギルドにある休憩所兼食堂に向かう事にした。

特に約束していた訳でもないので待つ必要は無かった筈なのだが、依頼の完了報告と報酬の受け取りを済ませたヒースは、律儀に俺の手続きが終わるのを待っていてくれたのだ。可愛い奴め。なでなで。ちなみに今は遅めの昼食として、本日のオススメランチが来るのを待っている所だ。

「いやあ…ホント大変だったんですよえ、あの時……」

ヒース曰く、それは一ヶ月前の事。

自分を含め五人の試験参加者とギルド職員でFランクの依頼に挑

んだ時の事だ。

依頼は歩いて半日程の森（俺とヒースが出会った所の近くらしい）の中の川に生息しているリバーサラマンダーを討伐し、死骸を持ち帰ってほしいというものだった。

ちなみにリバーサラマンダーというのは1メートル前後ののっぺりした茶色のトカゲの一種であり、普段は川や湿った洞窟の中なんかにいる大人しい生き物だ。

武器さえあれば子供でも勝てるし、肉は美味しいし乾燥させて磨り潰せば滋養強壯の薬にもなるという、引く手あまたの獲物である。

難易度も危険性もFランクらしく低いものだったのだが、そう侮ったのが間違いだった。

弱くて美味くて薬にもなる。

そんなあらゆる意味で美味しいリバーサラマンダーが絶滅しない理由は繁殖力に有る。

だいたい三ヶ月に一度の周期の産卵で一匹のリバーサラマンダーが三十匹前後の子供を産み、子供は二ヶ月で成体となる。つまり増えるのだ。それも爆発的に。

もちろん個体としては弱いので、森の中その他の動物や魔物に捕食されるので生態系が崩れたりして問題になった事は無い。

そんなリバーサラマンダーを狩るにあたって、一つ気を付けなくてはならない注意点がある。

リバーサラマンダーを狩る時は、子供には手を出してはならない。

それを知らなかった試験参加者の一人が、まだ孵ったばかりのりバーサラマンダーを遊びで踏み潰したのだ。

子供が踏み潰されるのを見た親は、甲高い鳴き声をあげて他の親達に危険を知らせた。

その結果、親達は子供達を呑み込んで体内に隠し、川の深い所や洞窟に逃げ込み、辺り一帯からりバーサラマンダーが姿を消してしまった。

さらにりバーサラマンダーを狙ってきた空腹の野犬の群れや魔物に出くわし、気付いた時には囲まれて三日三晩のサバイバルを過ごす事になったのである。

幸い緊急の依頼ではなかったのだからなんとか達成できたらしいが、もし急ぎの依頼だったら試験は不合格になっていただろう。

「もうホント、何度死ぬかと思った事か」

「まあ災難だったなとしか言い様がないが……そういう特殊なケースを除けば、基本的には試験は簡単な依頼になるんだろ？」

「そうですね、試験で不合格になる人はそうそう居ないって聞いた覚えがあります」

りバーサラマンダーの子供を踏み潰した人は不合格になりましたけどね、とヒースが黒く笑った。



さて。

突然だが、保存食というのは名前の通り保存が利く食べ物である。大体は塩漬けだったり干して乾燥させてたり燻製されてたりする物によっては嗜好品だったり、生の時とは違う味や風味を楽しむ物もあるが、基本的には固かったりしょっぱかったりして美味しくない。

だから昨日の朝食以降は保存食で済ませていた俺にとって、この遅めの昼食は非常に待ち遠しいまともな食事だったのだ。

だったのだが……。

小さく切った野菜が入った妙に味が薄いスープ。  
独特の臭みのある豚肉のサイコロステーキ。  
初めて食べるガチガチのパン。

……ビックリした。

あえてもう一度言わせてもらおう。

ビックリした！

まさか保存食と同等としかいえないような料理が出てくるとは…  
…がっかりである。

試しにここの料理はいつもこんな感じなのかヒースに訊いてみたが、メニューは違えど質に関しては大した違いは無いようだ。

俺の質問に首を傾げていたし、質問の意図がわからないのだろう。つまりこれがこの食堂での日常的な料理という事になる。

まさにカルチャーショックである。

よもや家を出て二日目の昼に家に帰りたくなるとは思わなかった。さすがに普段食べてる人の前で貶したりする気は無いし、少ししか食べないで残すのも気が引けるので食べはするが…。

マスターの料理が恋しい。

『私もラギさんが恋しいですぞ』

.....  
.....  
.....

幻聴が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。

あと何故か懐にしまっておいた筈の、神像を入れた布袋が床に落ちてガシャッと音を立てたが、気にしない事にした。

『具体的にはお風呂あがりの上気した顔とか寝起きの眠そうな顔とか美味しそに御飯を食べる顔とか寝顔とか寝顔とか寝顔寝顔寝顔寝顔ハアハア寝顔ねがぐふうッ!?!?』

……けぶ。

吐きそうだ。あと最後のは何があった。

……いや、気のせいだろう。

これからは顔を隠して寝るか、うつ伏せで寝る事を考えた方が良  
いかもしれない。

食後に一つの問題に気が付いた。

物価がわからないのだ。子供の頃に俺がお客さん役で、先生が  
説明役、母さん達三人が店員役として買い物練習はしたが、実際  
に買い物をした事がない。

この世界の通貨はガルド。

一番安い硬貨が固いフルルゴ貝の殻を使った人間の目と同じくら  
いの大きさの貝貨で、銅貨がその十倍、同じ厚さで太さ長さが小指  
くらいの四角い銅板がさらにその十倍。

その後は銀、金、金板百枚で竜の鱗を使った竜貨となる。

簡単に表にすると、

竜貨 1 0 0 0 0 0 0 0 0 0

金板 1 0 0 0 0 0 0 0

金貨 1 0 0 0 0 0 0 0

銀板 1 0 0 0 0 0

銀貨 1 0 0 0 0

銅板 1 0 0

銅貨 1 0

## 貝貨1

こうなる訳だ。

ちなみにズボンのポケットには竜貨が一枚、金板が二枚、金貨が二枚、銀板が二枚、銀貨が二枚、銅板が二枚。

つまり俺の所持金は1022222200ガルドとなる。

俺はヒースに待っていてくれた礼に払わせてくれと言い、店員にこれで足りるかと銅板を一枚渡した。

お釣りは銅貨九枚だったので、今の食事で一人前貝貨五枚という事か。

……………もしかして小遣いが多すぎるのか？

## 第六話

「ごめんねえ、今日はもう満室なんだよお」

「……そうですか、わかりました。」

恰幅の良い受付のおばちゃんに礼を言って宿屋を出る。

すでに空は夕焼けの赤に染まり、人通りは疎らで、まるで昼間の喧騒が嘘のようだ。

「まいったな」

途方に暮れて、思わずため息を吐く。

昼食の後、俺達はヒースが宿泊していた宿屋に向かったのだが、今日の昼前になって突然大勢の客が訪れて満室になったのを聞き、大急ぎで泊まる所を探す事になったのだ。

ヒースはヒースで、今日で料金の先払いによる契約が終わるのはわかっていたのだが、ここまで突然人が増えるとは思ってなかった。なので普通に泊まれるものと思っていたらしい。

昼のお祭り騒ぎの時に気付くべきだったのだろうが、俺もヒースも旅に馴れていない弊害がモロに出してしまった。楽天的過ぎたと言わざるを得ない。

「これで九軒目か……こりゃ素直に野宿かねえ」

「すみません、僕が気付いてれば……」

「だから謝るなって。それは俺も同じだし、今さら気にしても仕方ないだろ？」

ヒースは五軒目を過ぎた辺りからずっとこんなだ。責任なんか感じる必要も無いのに謝りっぱなしで、逆にこつちが悪い事してるみたいだ。

助けた時の礼の言われようもそうだし、何かと気にして重く受け取ってしまうのかもしれない。

「すみません……」

だから謝るなつてのに。どうしたもんかねえ。

しかし真面目な話、このままだと野宿だ。野宿自体は昨日もしているが、やはり明日の試験の事を考えると休んでおきたい。

もう近場にあるという宿屋は全部見たし、他の宿屋は離れたら所にある。今から行っても厳しいだろうし……ん？

「ヒース見ろ！メイドさんだ、メイドさんがいるぞ！？」

「め、メイドさん？」

長袖のエプロンドレスに、名前は知らないが頭にはヒラヒラが付いたカチューシャ。これがメイドさんでなくて何だというのか！

「すげえ、俺メイドさんって初めて見たぜ！本当に実在するんだな！？」

掃除洗濯炊事子守夜伽戦闘まで完璧にこなすエリート女戦士……まさかこんな所でマスターと同等の存在と出会えるとは！

マスターも普段はちょっとアレだけど、俺の訓練に付き合ってくれる時はメチャクチャ強いし、やっぱり俺なんか相手にならないくらい強いのだろうか？

「この街にも貴族は住んでるし、ちよくちよく見掛けますよ？」

「マジかよ……」

山より巨大なドラゴンを一人で倒して来たとかホラ吹いてやがった時もあったが、少なくともマスターは俺よりは桁違いに強いのは確かだ。

そんなマスターと同等レベルのメイドが何人もいるのか？  
恐ろしい、なんて恐ろしい街なんだ、ネフロは。

「あの人に他の宿屋を知らない訊いてみませんか？」

「め、メイドさんにか？」

そんな気軽に話し掛けて大丈夫なのか？

万が一、機嫌を損ねたりしたらミンチより酷い事になるんじゃない……

…。

「すみませ〜ん、ちょっと良いですか？」

「うわもう話し掛けてるし!？」

「っーか俺を置いていくな！」

「リコリスに何か御用でしょうか」

メイドさん……茶色の髪をショートカットで揃えた、人形のように無表情の少女は、実に冷たい抑揚など皆無の声でそう言った。

リコリスというのは彼女の名前だろうか？

すつきりした顔立ちに意思の強そうな、それでいて何処か違う所を見ているような不思議な瞳が印象的だ。

歳は俺達と同じくらいに見えるが、その冷たげな表情もあって少し年上にも見える。

可愛いと言うよりは綺麗という感じだが……しかしこんな俺達とたいして変わらないような女の子が、マスター並に強いというのだろうか？

俺だつて幼い頃から師匠にしごかれたり、母さん達に各々の戦い方を教わったはずなんだが。

……もしかして俺ってクソ弱い？……ああ、だから神像くれたのね……鬱だ。



「この辺りで、まだ部屋が空いてそんな宿屋って知りませんか？」

「回答不能です」

「え？」

「この街の情報は入力済みですが、現在の宿屋の宿泊状況は未入力です。現在のリコリスでは回答は不可能と判断します」

「は、はあ、えっと……」

よくわからない言い回しにヒースが困った顔でこちらを見る。

うん、俺もよくわからん。っていうか、

「もしかしてアース・ヒューマン？」

メイド服から出ている手首が、色こそ肌と同じ色だが人形のような球体関節だ。

「アース・ヒューマンって、何ですか？」

アース・ヒューマンというのは大地の神、ガイアラナスによって創られたとされる種族だ。

見た目は人間に近いが関節が人形のような球体関節で、人間とゴレムの中間の種族とされている。

非常に数が少ない種族でまだまだ謎が多いらしい。俺に教えてくれた先生も知識だけで、実際に見たことは無いらしい。

「はい、リコリスはアース・ヒューマンです」

「アース・ヒューマンは身体能力が高い上に、大地の神から強い祝福を受けてるって話だし、メイドさんになれるのも頷けるな」

「うむ、種族的なアドバンテージが有るってんなら納得だ。俺がクソ弱い訳じゃない。」

「……あの、強いのとメイドさんとどう関係が？」

「知らないのかヒース、メイドさんは何でもできて、さらにドラゴンを倒せるくらい強くないとダメなんだ」

「……あれ？なんかメイドさんの定義に齟齬が生じてます？」

何故かヒースがそう言っつて首を捻る。

「リコリスはメイドではありません」

え。

「メイドさんじゃないのか？」

「はい」

「じゃあなんでメイドさんみたいな服着てるんですか？」

「ガイアラナス様に頂きました。これを着てネフロに向かうように」と

「向かうようにって、何のために？」

「不明です。ガイアラナス様はご多忙です。リコリス達にそのお考えを説明される事はありません」

「説明も無しって……着いてから新しい指示が来たのか？」

「いいえ。ガイアラナス様はご多忙です。指示の後の行動はリコリス達に一任されています」

なに考えてんだ神様。理由も教えないで行かせておいて、何をさせたいのかも教えないなんて。

「じゃありコリスさんは何をすれば良いとか、何を探せば良いとか、なにもわからないんですか？」

「はい、不明です。行動は全てリコリス達に一任されています」

「それって大変なんじゃないか？」

「質問の意味が不明です。大変の意味を説明願います」

「疲れないかとか、面倒じゃないかって事だ」

「リコリス達は疲れを感じる事はありません。面倒と感じる事はありません」

.....。

「ごつい言い方はしたくないが、なんと云うか疲れるな、このメイドさん。話し方に抑揚が無いからか、丁寧過ぎるからか。あ、メイドさんじゃないのか。」

「じゃあその、探し物か何かはわからないけど、とにかくそれがみつからなかったらどうするんだ？」

「みつからないなどという事はありえませんが。みつかるまで探し続けます。リコリス達にはそれが可能です」

「みつかるまでって、そんな……」

「ずいぶん献身的というか狂信的というか……いや、その手のやつとはまた別物か。使命感か？」

「いや、それが当然と考えてるなら使命感とも違うな。」

「つまり彼女らにとっては、それが普通なんだろう。」

「なら関係無い人間が口を挟む問題じゃない。他の種族の文化と受け入れるべきだ。」

「……そっか。まあいいや、じゃあ俺達行くから頑張れよ」

「はい、ありがとうございます」

「え、あの、ラギウスさん？」

「いいから行くぞ」

俺は何か言いたげなピースの手を掴み、有無を言わずそのまま

メイドさん……リコリスから離れた。

「もう暗くなっちゃったし、アイツはアイツの探し物がある。お前がどう思おうと、アイツにはそれが普通なんだ。他人が口を挟む事じゃない」

「で、でも、あんなの……」

「可哀想、なんて言うなよ？そんな同情は失礼ってもんだ。アイツはそんな事で怒らないだろうけど、言うべきじゃない。」

「……………」

「アイツにとっては当然の事で、やるべき事なんだ。本人が決める事を、それを否定するような言い方はやめとけ」

「……………よくわかりません」

「がつつり関わって、そいつの生き方に責任を持てるんじゃない限り、人の生き方に干渉するべきじゃないって事だ」

もし仮に、善人面して俺に『人を殺してお金を貰う傭兵になんてなっちゃいけない』なんて言う奴がいたら、俺はきつと許さない。

相手の境遇も気持ちも知らない人間が踏み込んで良い領域じゃない。

もし俺に傭兵になると言って良い奴がいるなら、それはあの四

人だけだ。

よーするに。

「否定しないで、頑張れって応援してやればいいと思っぞ」

それだけの話だ。

## 第七話

「や、やっぱりやめましょうよ……こんな所無理ですよ」

「堂々としてるって。逆に不振がられるぞ？」

「そんな無茶な……」

「いいから行くぞ」

「あ、あう」

俺はキョドってるヒースに苦笑しつつ、鏡のように磨かれた大理石の床を進んだ。

あれから何人かの通行人に訊いて何軒かの宿屋を回ったが、結局どこも満室で泊まれる所は無かった。

そして最後に残った宿屋にたどり着いたのだが……。

一言で言えば、それは城だった。

先生に見せてもらった本に載っているのより少し小さいが、それでも周りの建物より数段大きく、見るものを充分に威圧する佇まいの小城。

門をくぐり、噴水のある庭を歩けば貴族らしき身なりの良い男女

がちらほらと姿を見せ、明らかに冒険者という俺達の外見を見ては眉をしかめる。

門を見た時点でわかったし確認するまでも無かったが、お貴族様御用達の宿だったのだろうか。

よりよって最後がお貴族様のための宿とは……こりゃ野宿かねえ。やれやれだ。

最初に目についたのはその広さだった。

普通の宿屋の数倍はあるであろうホールにフロントがあり、磨き抜かれた大理石の床が、驚くほど高い天井から吊るされた光り輝く巨大なシャンデリアの灯りを反射している。

視覚を楽しませるためであるう純白の柱や調度品は貴族ではない俺から見ても洗練され、格の高さを窺わせる。

「いらつしゃいませ、ローゼンガーデンへようこそ」

それはフロントに向かって歩きだしてすぐの事。

タキシード姿の品の良い老紳士が話し掛けてきた。

長めの白髪を後ろで結び、口髭をたくわえて穏やかに微笑む老紳士。

なんとなくだが、真面目に家の仕事をしている時のマスターに雰囲気似ているような気がする。

「まだ部屋は空いていますか？」

「はい、まだ空いているお部屋はございますが……」



ちらりと、老紳士はさりげなくヒースと俺を見て言葉を区切る。

「シングルのお部屋は満室でございますして、ツインのお部屋が一室だけしか空いていない状態でございますので……ご一緒に宜しかったですか？それに些かお値段の方が……」

「あー……」

宿泊拒否されなかったのも、ここまで丁寧に対応されたのも予想外だったが、その可能性があったか。

金はなんとかなると思うが。

どうしたものか……うん、仕方ない。

「ヒース、仕方ないからお前だけ泊まれ。俺は野宿で良い」

「はあ！？ む、無理ですよ！こんな凄い所に一人で泊まるなんて！？」

「仕方ないだろ、二人部屋しか空いてないんだから。金ならなんとかなる」

「いやいやいや、意味わかりませんよ！？ 二人で泊まれば良いじゃないですか！？」

「いやいやいや、お前こそわかってんのか？今日出会った人間と同じ部屋で眠るなんて、命が幾つあっても足りないぞ」

師匠の受け売りだが、金をケチったり相手を簡単に信用して同じ部屋で寝たりして、身ぐるみ剥がされたり殺されるなんて日常茶飯事らしい。

そうでなくても俺は男でヒースは女なんだ。しかも超可愛い。とても理性がもたん。

「大丈夫です！僕はラギウスさんを信じてます！」

「いや、だから人を簡単に信用しないように言ってるんだが……………」

「信じてるんです！ ラギウスさんは僕を信じてくれないんですか！？」

うわぁ、じつところっちを見つめて、その言い方は卑怯だろ…………。

「……………もしかしたら俺は悪人かもしれないし、どうなるかわからんぞ？」

「……………いいんです。ラギウスさんは僕の命の恩人なんですから」

じつと俺を見つめるヒースの瞳から、俺は目を逸らせなくなる。その瞳の輝きに、汚れを知らぬその無垢な眼差しに、何故か引き寄せられる。

……………ああ、なるほど。

とかく重く受け取るところが有るとは思ってたが、ここまでとは。こいつは本当に損な性格だな。

重症だな。手に負えない。完全に手遅れだ。  
だから。

「すみません、その部屋でお願いします」

短い間だが、一緒にいる間くらいは守ってやりたいな、と思った。

そんなこんなで、老紳士と違ってじろじろと俺達を見る受付の男の慇懃無礼な口を、ドヤ顔で告げられた2000000ガルド……金貨一枚できつちり黙らせると、手荷物を持ってくれるというのを断り、俺達は老紳士に案内されて部屋に向かった。

「……………」  
「……………」

絶句した。

「お気に召して頂けたでしょうか？」

お気に召すとか召さないとかいう問題じゃない。

たった二人で泊まる部屋なのにギルドの食堂より広いとか、絶対間違ってる。というか、ソファーはともかくバーや遊戯台がある

のは何の冗談だ。

しかもベッドが無いってことは、さらに奥に部屋が有るって事か？  
どうかしてるぞ本当に。」

「部屋の施設はご自由にご利用ください。お食事はレストランかお部屋にお運びするか選べますが、いかがなさいますか？」

「……ああ、じゃあ部屋でお願いします」

「かしこまりました、それでは後程お持ちいたします。ラギウス様こちらはカフェの特別招待券でございます。宜しければ食後にでもご利用ください」

そう言って差し出されたカラフルな紙のチケットを受け取るが、正直頭が追い付かない。

貴族つてのは皆こんな空間で生活しているのだろうか？

いや、ちよつと待てよ。

宿泊費2000000ガルド。

昼食代10ガルド。

だからえ〜〜と。

竜貨1000000000

金板10000000

金貨1000000

銀板100000

銀貨 1000  
銅板 100  
銅貨 10  
貝貨 1

二万倍って事か。そりゃ立派にもなるわ。  
うん、納得。

.....。  
.....？  
.....！？

いやいやいや、おかしいだろ！？  
受付の男がムカついたから簡単に払っちゃったけど、バカ高いだ  
ろ！？

一泊だけで幾ら取るんだよ！？  
いくら町に来るのが初めてで物価や相場がわからないって言った  
って、さすがにクソ高いのはわかるぞ。  
もう払っちゃったしどうにもならないけど、ぼったくられてるだ  
ろ絶対.....。

「御用の際は寝室に置いてある呼び鈴でいつでもお呼びください…  
…このお部屋にお泊まりになるのは、王室の方々に続いてラギウス  
様とヒース様で……三組目でございますか。どうぞ、ごゆるりと寛

「お下ささい」

……… 貴族じゃなくて王室御用達なん？

## 第七話（後書き）

うーん、当初の予定より戦闘描写まで行くのに手間取っております。  
一番書きたかったところまでもう少しなんですけどねえ。

あ、丁寧な言葉遣いとかわからないし、誤字脱字があったら教えてください。  
ください。

## 第八話

「はんはひっひよおふんふおふええふあくひふあひふんへふふえ」

「わからんから飲み込んでから言ってくれ」

頬をぱんぱんにして焼き菓子を頬張るヒースの顔を見て、思わず微笑する。

くっそう可愛いなあ。

ウエイターが淹れた花のような香りのする熱いお茶を啜り、その渋みに眉をしかめて焼き菓子を一口かじると、濃厚な卵と牛乳の風味と甘味がお茶の渋みを打ち消してくれた。

……確かクッキーといったか、これは皆への土産に後で貰っていたか。

家で見た事がないが、マスターは作れないのだろうか？

「なんかもう、一生分の贅沢しちゃったような気がします」

四皿目になる小さなバスケットに入った焼き菓子を頬張り、嚙下したヒースの呟きに苦笑しつつ、ナプキンで粉塗れるになっていた口元を拭ってやると、俺は手を挙げてウエイターを呼んだ。

「すみません、クッキーとお茶のおかわりを。あとケーキってありますか？」



あの後、食事は部屋に運んでもらったのだが、それで正解だったと思う。

ヒースは貴族が食事を摂るような店でのマナーは知らなかったし、ワゴンで運ばれてきた料理を食べる度に目を白黒させて大騒ぎしては、レストランから叩き出されていたかもしれない。

ナイフやフォーク、スプーンなんかは外側から使う等の最低限のマナーだけ教えたが、格式張ったレストランではきつと緊張して味なんか分からなかっただろう……まあ、それは俺も同じだが。

ただでさえ凄い部屋に緊張してるんだから、食事くらいは気楽に楽しむべきだろう。

料理自体はマスターの料理にも負けないレベルで、存分に堪能できた。

あと金とマナーの事で貴族なんじゃないかと思われたようだが、しっかり否定しておいた。

ちなみに食事を待つ間に鎧を脱いで楽な格好になると、部屋を探検してみようという事になった。

最初に入ったホールのような部屋とは別に、十人は眠れそうなベッドが二つある寝室、無駄に広いトイレが三つ、団体客用にしか見えないデカイ風呂が二つ、なんの為にあるのかわからない部屋が三つ、カードゲーム用のテーブル等が鎮座するプレイルームが一つ、そしてパーティーができそうなテラスという間取りだった。

こんだけ部屋が有るのになんで寝室を二つにしなかったのか全く理解できない。

「つーか絶対二人用の部屋じゃないと思う。部屋の中に階段があって二階建てになってるってどうなってんだ。」

それに部屋の装飾品なんかを盗んだら、それだけで一財産築けそうだ………と思ったら、何気に盗難防止用の魔法が使われていた。残念。

さらに一つ判明したのだが、普通の宿屋には風呂なんて無いらしい。有料で大きめの桶を借りて、その中にお湯を入れて身体を拭いたりするらしい。

「一応大きめの桶なら中に入ることも出来るらしいが、そんなんで疲れがとれるのだろうか？」

そして食事の後、ドデカい風呂に飛び込みたい欲求に駆られたが、そのまま寝てしまいそうだと思った俺達は呼び鈴で人を呼び、念のため剣と金と神像を持ってカフェに案内してもらったという訳だ。

が。

案の定、案内されたのは普通のカフェじゃなかった。

黒い大理石の床と、純白の壁、天井、柱。

壁には何かしらの神の絵と思しき絵画が無数に飾られ、蝋燭の灯りで妖しく照らされている。

そしてそれだけなら不気味だったかもしれないが、部屋の奥にあるステンドグラスによって、神々しいとすら思えるようされていた。

創造神バルケルス。

かつてこの世界を創造したとされる、最も偉大なる神。

その創造神をモチーフにしたステンドグラスは、たとえ創造神を知らぬ者であっても目を釘付けにするような、一種の魔法のような迫力があつた。

もし俺が神という存在に対して、もっと信仰が深かったなら、あのステンドグラスの前で跪いていたかもしれない。

この世界には神が実在する。

滅多に人に姿を見せる事はないが、信心深い者や寵愛する者には稀に神託を授け、力を与えるという。

その為、戦士や騎士、兵士等は戦の神を。

医者や薬師は癒しの神を。

農民や漁師は豊穰の神や海の神を。

商人や冒険者は商売の神や繁栄の神、守護者の神や旅の神を信仰する。

信仰は自由だし、地方の土着神や神の眷属の神なんかも無数にいて切りが無い。

そしてそれぞれの神に神殿があり、昼間見たようなシスターも、どの神殿のシスターかは、少なくとも俺には見ただけでは分からない。

そんな中で有史以来、一度も神託を授けた事も無く、姿を見せた事も無いと謂われているにも関わらず、最も多くの人々に信仰され、最も多くの神殿があるのが創造神だ。

曰く、この世界がある事が、自分達が生きている事自体が、創造神のお陰なんだそう。

俺にしてみれば、そんな本当に存在するのも分からない神を崇める気にはなれないが、他の神が『創造神は存在する』と言ったらしいので、いる事はいるのだろう。

で、そんな有り難いステンドグラスや絵画を鑑賞しながらお茶とお菓子を堪能してるって訳だ。

「俺個人としては特定の神様を信仰してないんだが、信仰してる人間にはどんな感じなんだろうな、この空間は」

「どう、ですかね。僕も信仰してないけど、なんだか少し不思議な気分ですし」

どうやらヒースも俺と同じ気分らしい。

このカフェに入った時から視線を感じるような不思議な感覚がしたが、それが決して不快ではない。

他に客がいない事もあるんだろうが、この空間全体が静寂で満たされ、僅かな会話意外は許されないような、侵してはならない聖域のようにすら感じる。

いや、感じるのではなく、実際に神聖な聖域なのだろう。少なくともそう感じさせる何かが、この空間にはある。

「無駄に広い部屋はともかく、このカフェなら高い金を払う価値がありそうだな」

俺はそう言って、クッキーをもう一口に放り込んだ。

「如何でしょう、楽しんで頂けていますでしょうか？」

ヒースがトイレに立ち、一人でステンドグラスを観ながらお茶を飲んでると、いつからそこに居たのか、例の老紳士がテーブルの脇に佇んでいた。

気配など微塵も無かった。驚きを顔に出さないようにしたつもりだが、出来ているだろうか？

「ええ、とても。こんな不思議な感覚は初めてです」

「ありがとうございます、私<sup>わたくし</sup>自慢のカフェを気に入って頂けたなら、これ程光栄な事はございません」

私自慢の、ね。

「失礼ですが、貴方は？」

俺の問い掛けに一瞬だけ目を少しだけ見開くと、彼は本当に愉快そうに笑い、一礼する。

「申し遅れました。私、このローゼンガーデンのオーナー、ハイデ  
ンライク・シュトレグスと申します。どうぞお見知り置きを」

オーナー……それなりの立場の人間だろうとは思っていたが、まさかトップだったとは。

「成る程、オーナーの方でしたか……一つだけお訊きしても宜しい  
ですか？」

「はい、何なりと」

「どうして僕達を泊めてくれたんですか？ どう見ても貴族の類い  
には見えなかった筈ですが？」

俺が騙されてたりぼったくられていないのを前提として、ここが  
本当に王族や貴族が利用するような施設だとすれば、宿という意味  
では間違いなくトップクラスだろう。にも関わらず、どうして俺達  
みたいな冒険者を客として受け入れたのか。

普通なら門前払いか、つまみ出されるのがいい所だろう。

「代行者の方であれば、王族や貴族の方と同等か、それ以上の御持て成しをさせて頂くのは当然の事でございます」

「だいこうしゃ？」

知らない、聞いた事の無い言葉だ。

「はて、ご存知ありませんか？」

「ええ、良ければ教えてもらえますか？」

「畏まりました、僭越ながらご説明させて頂きます」

そう言って老紳士、ハイデンライク氏はこほんと咳払いを一つ。

「一言で言ってしまうえば、代行者というのはその名の通り、神の代干行者ジエントとしての役割を、神に認められた者の事です」

「代行者としての役割？」

「はい。戦の神なら戦、戦いを。癒しの神なら傷付いた者を治療し、癒す事を。各々の神が必ず何かの役割を持っているのはご存知ですね？」

「はい」

まあそつでなきや??の神なんて呼ばれないだろう。

「その役割を果たすにあたって、神の代行として神の役割の手伝いを任された者を代行者と呼びます。戦の神の代行者なら戦に赴き、

癒しの神の代行者なら人々を癒す。それが代行者です」

「つまり自分が信仰する神様の仕事を手伝うと？」

「はい。もちろん滅多に代行者として認められる者はいませんが、神に授けられた力は絶大といわれ、神殿によっては代行者を半ば神そのものと見る神殿もありますな」

「人間を神として見るんですか？」

「はい、それだけの力が有るといふ事でしょうな。噂によれば昔、戦の神の代理人は国同士の戦争に神殿ごと介入して双方を滅ぼしたり、癒しの神の神殿にいる代行者の一人は、幼い頃に寵愛を受けたので子供のまま成長せず、癒しの巫女と呼ばれて生き神として扱われているとか」

やりたい放題だなおい。

それに癒しの巫女って、幼い子供本人がちゃんと全部理解して、望んでなったのか？

そうでないなら寵愛だの祝福だのと言っても、呪いと変わらない気がする。

……ん？

子供のまま成長せず？

「あの、癒しの巫女が子供のまま成長しないって、つまり」

「はい。各々の神につき一人、最も強い寵愛や祝福を受けた代行者



は不老といわれています」

マジかよ……。

それって本当に人間じゃなくなって、神になるって事じゃねえか。

「ですので、過去に大勢の王族や貴族が持てる財を尽くし、代行者となろうとしたとされていますが、金や権力で成功したという話は聞いた事ありません。逆に代行者の命を狙うのも、神と神殿を丸ごと敵に回す事になるので、近年では聞きません」

つまり昔はあったわけだ。

まあ金持ちが不老不死を求めるのはよくある事らしいしな。

「代行者についてはよく解りました。ちなみに今の話は普通に誰でも知ってる事ですか？」

「小さな子供とかでなければ、基本的には誰でも知っているかと」

つまり一般常識ということか。

こういった話なら先生辺りが教えてくれそうなんんだが……何か考えが有ったのだろうか？

そして残念ながら、確かな事が一つ。

「説明してもらっておいて申し訳ないんですが、僕は代行者なんて御大層なもんじゃありませんよ？」

期待を裏切って悪いが、ハイデンライク氏の勘違いだろう。神の寵愛も祝福も知らないし、特定の神を信仰してすらいない。それでも俺を代行者にしようなんて神様がいたら、よっぽどの物好きだろう。

「はて、そんな事はないと思うのですが……ああ、そうそう。代行者の話で忘れていた事が一つ」

どこか芝居がかった口調と仕草で、ハイデンライク氏が人差し指を立てる。

「神像をお持ちではありませんか？」

……なに？

「代行者は『代行者の神像』と呼ばれる神器を通じて、神の力を振るうそうですよっ」

だいじょうじや。

だいじょうじやのしんぞう。

『べいじぞう、手に取ってみてください』

「……………」

思い出した。

どうして忘れていたのか。

初めて聞く言葉なんかじゃない。

あの時、マスターがハッキリと言っていたじゃないか。

『代行者の神像と呼ばれるものです』

と。

## 第九話

……どういう事だ？

もし仮に神像が本物だったら、俺は代行者という事になるのか？

……では神は？

決まっている。母さん達四人だ。

他の神とは全く繋がりが無いし、神像は四人の本当の姿を象っているのだから。

……本当にそうなのか？

不明。情報不足。ハイデンライク氏の話を鵜呑みには出来ないし、実際に代行者の力を見ないとなんとも言えないだろう。

なにより……あの四人が神というのがあり得ない。

うん、断言できる。

あり得ない。いやマジで。

あの四人が神とか無いわー。もし万が一あの四人が神だったりしたら、絶対さっきの癒しの神はただのロリコン野郎だぜ？  
そんな神ばっかの世界なんて終わってるだろ。

『酷い言われ様ですね？』

.....  
.....  
.....

おかしい、また空耳だ。

いや、幻聴か？

とりあえず先生は除外するんで、人の心の中を読まないでくださ  
いお願いします。

『何時如何なる時も、見守られていると思ってくれて構いませんよ  
』？

覗き、いくない。

『いまさら言われましてもねえ』

いつから!?

ねえ、いつから覗かれてるの!?

「……………ウス様、ラギウス様？」

「は!？」

いかな、少し疲れてるのかも。ハイデンライク氏が心配そうな顔で見てるじゃないか……可哀想な子を見る顔じゃないと信じたい。

「すみません、少し考え事をしてました。それで、どうして俺が神像を持っていると？」

「神像には強い魔力が宿ります。魔力を感知できる者であれば、一目でわかるものです」

つまり俺が持っている神像の魔力で、俺が代行者だと思った訳だ。

……………どうしたものか。

ハイデンライク氏の話が本当で、四人が神で、さらに本人達が魔物と名乗った事実を総合した場合、一つの可能性が生まれる。

それは四人が魔神の可能性。

魔神とは魔物が信仰するとされる強力無比な魔物。魔物達の側の神。

昔は人間が信仰する神より頻繁に姿を見せ、天を裂き地を割り海を燃やしたとされる存在。

基本的に人間や神とは敵対関係にあり、魔神を倒した者は英雄として歴史に名を残すといわれている。

……が、もしそうなら人間の俺を拾って育てたりするだろうか？

俺が寝てる間にベッドに入って添い寝してきたり、俺に似合いそうだからと大量の服を買ってきたり、俺と食事のオカズを奪い合ったり、俺が風呂に入ってるのを覗いたりするだろうか？

……………信仰する魔物が可哀想に思えてきたぞ（特に最後のマスタ―）。

そしてもし本当に四人が魔神で、俺が代行者なら、俺は魔神の代行者という事になる。

質問がそのまま回答になりかねないので、魔神の代行者が存在するのかをハイデンライク氏に訊く気にはなれないが、間違いなく人間からは友好的な目では見られないだろう。

「心当たりが無い、という事にさせて頂けませんか？」

結局そう言って、とぼけて終わりという形になるよう、頼むしかなかった。

ケーキを刺したフォークを口に運び、お茶を飲みながら思考する。

自分は本当に知らない事だらけだな、と思う。

世間知らずなのはそう育てられたからかもしれないし、この旅はそれを俺に実感させる為のものかもしれないが。

帰ったら皆に訊きたい事が沢山ある。それだけでも今回の旅は有意義なものと言えるような気がした。

あとは明日の試験に合格して帰るだ「す、すみません!？」……  
け、だ？

突然聞こえたヒースの声に何事かと振り返る。

見れば尻餅をついたヒースと、身形の良い貴族らしき男が二人。

おそらくトイレから戻ったヒースが絵を見ながら歩いていてぶつかったのだろう。ドジっ娘か。可愛い奴め。

苦笑して姿勢を戻し、お茶の入ったカップに手を伸ばす。

肉を打つ重く鈍い音が聞こえたのは、カップを口につけた直後だった。



再び振り替えてみれば、ヒースは先程尻餅をついていた所から少し離れた所に倒れていて、片方の男が手をぶらぶらと振っている。

……まさか、殴った、のか？

いや、そんな馬鹿な事はあるまい。

俺は母さん達から各々違う事を教わったが、そんな中で四人が四人とも同じ事を言っていた事が一つだけある。

『戦場やこちらの命を狙ってくる相手でない限り、女子供に手をあげてはならない』

四人の見解の相違からか、同じ質問をしても答えが違う事は多々あった。そんな四人が口を揃えて語った教えだ。

そして見たところ、あの二人は貴族のようだ。

貴族は傲慢で我儘で自分の利益の為や欲望を満たす為にしか動かない反面、教育は行き届き、礼儀作法は叩き込まれていると聞いている。

ならばそんな事をする筈がない。

そうだ、女子供を殴るなんて、そんな事をする筈がない。

……なのに。

……なのにどうして、ヒースの胸ぐらを掴んで、無理矢理立たせたりしてるんだ？

わからない。

この旅は本当にわからない事だらけだ。

俺はそんな事を思いながら、まだ手付かずだったヒースのケーキが載った皿を持ち、立ち上がるのだった。

「ハイデンライクにも困ったものだ。なあノルバント、おまえもそう思うだろ？」

ヒースの胸ぐらを掴んだ金髪碧眼の男は、笑いながらもう一人の赤髪の男に同意を求める。

年齢的には二十代半ばくらいだろうか。それなりに整った顔ではあるが、あまり特徴が無い。

いや、よくよく見れば目許と口許には何か下卑たものを感じる。

それに肌の色は生っ白く、不健康そうだ。

なんともまあ、人を不快にさせる顔だ。

「全くだ。前々からなにかと理解し難い所が有ったが、まさかこんな薄汚い下民を出入りさせるとは。酔狂の域を越えている。老いてボケたか病気だな」

黒髪の男の言葉に、燃えるような赤髪を短く刈り込んだ男がそう

言つて笑つ。

年齢は黒髪の男と同じくらいだろう。

ただし黒髪の男とは違つて、こちらは赤眼に褐色の肌と精悍な顔つきもあつて、美男子と言つてよいだろう。

故に、その低く聞き心地の良い声とも相俟つて癪に障る。やはり不快だ。

「我々にこんな、何処の馬の骨とも知れぬ者と同じ部屋で茶を飲ませようとは。まさかとは思つが、我がバズワルド家への嫌がらせか？」

「まさか。そんな事をして何の意味も無いじゃないか」

「わからんぞ？ ボケた老人の考えは理解できないからな。現に今、この下民がぶつかつてきたじゃないか。この私にぶつかるなど、本来なら斬つて捨てる所だが……妹が厄介になつてゐる手前、そうもいかん」

「それを見越しての事だとしても？ 考え過ぎだな。偶然だよ偶然」

「だとしても、こんな小娘を泊める上に、この部屋に入れるなど度が過ぎる。父上にお伝えするべきかもしれない」

「ついでに下民にボコボコにされたらと伝えておけ」

「なに？」

俺は振り返った男の顔にケーキが載った皿を叩きつけ、ついでに皿ごと男の顔面を殴り飛ばした。

## 第十話（前書き）

色々悩んで遅くなりました。

少しずつ変化してますが、一応当初から考えていた展開になります。  
ここらからちよいと主人公の性格が見えてきます。  
もしかしたら嫌いになる方もいるかもしれませんが。  
続きはあとがきにて。

## 第十話

俺は男の手が離れて倒れそうになったヒースを抱き止め、顔を確かめる。

頬が赤くなつてはいるが、腫れたりはしてないし、唇を切つたりもしてないようだ。口の中も確認したい所だが、さすがに気を失っている女の子の口の中を弄るのは悪い気がする。

『キスで確認してみるのはどうかしら？』

……………母さん、そっちの方が余計悪いと思う。

『あら、試しに舌を入れてみたら血の味がするかどうかってだけの話よっ。』

試しにって何だ。むしろどっちが目的なんだ。

『もちろん口の中を切つてないか確かめるためよ！ もし舌を切つてたりしたらどうするの！？ 女の子が殴られたのよ！？ 迷つてる場合じゃないでしょ！？』

そ、そうなのか…………？

たしかにそうかもしれないが…………。

『そうなの！ わかったら早くしなさい！ ちゃんと舌を絡ませて

確認するのよ!? もし切ってるようなら、しっかり舐めてあげなさい!』

……そうか、これは治療なんだ。怪我をしてないか確認するためには仕方がない。他の奴から見たらただのデーブキスにしが見えないかもしれないが、ちゃんとした治療なんだ。血の味がしたら傷が有るって事だし、しっかり確認しなくちゃいけない。やましい事なんて何も無い。ヒースを助ける為なんだ。キスに見えるなんて不純で不埒な奴だけだそれはそうとまずは唇と唇だけを軽くあわせてそれから口内を触診するべきかいよいよ治療なんだから早く口内の確認をしなくては取り敢えず舌に細心の注意を払って堪能もとい出血の有無を確認しなくてはおっとそれにはもっとしっかり抱き締めないといけないなヒース勘違いするなよこれはお前の為なんだうわなんて柔らかくて良い匂いがするんだたまんねえハアハアいやいや違う早くキスを違う治療を

「き、貴様は何者だ!? 自分が何をしたのか分かっているのか!」

「……………」

『ちっ』

……ビククリするぐらい空気が読めないんだな、貴族って奴は。眼を見開いて硬直していた赤髪の男が、ようやく我に帰って喚きだしやがった。

あと数秒で確認できたものを。

「ぎゃあぎゃあ喚くな、女を殴ったバカを殴っただけだ」

「ば……………」

赤毛の男が口をパクパクさせるが、言葉にはならない。その顔がまるで、マスターが調理する前の魚のようで笑ってしまう。

そうだ、魚は水中でしか生きられない。コイツはケーキの代わりに、あお向けの体勢で口と鼻に熱いお茶を注ぎ続けてやろう。この不快な顔も、いくらかマシになるかもしれない。

いや、それよりも先に済まさなきゃいけない事があるか。

「謝罪を」

「な、何……………」

「謝罪だ。女を殴ったんだから、謝るのは当然だろ？」

悪い事をしたら謝る。そんな当たり前の事も教わっていないのだからだろうか？

しかもヒーソミみたいな美少女を殴ったのだ。その罪は計り知れない。

「ば、バカじゃないのかお前！？ 貴族を、それもバズワルド侯爵家の嫡子を殴っておいて、謝れだど！？」

「じつしゃく？」



公侯伯子男だから……上から二番目？  
……マジで？

「嘘だろ……」

「嘘なものか！ 下民の分際でこんな事をして、ただで済むと思っ  
なよ！？」

信じられん……。

いや、だって、あり得ないだろ？

確かサザンフィード王国（あ、今さらだけど国名な）には侯爵家  
は五家しか無いはずだ。

さっき殴ったのがそんな侯爵家の息子だなんて……。

「跪け！ 下民のくせにふざけた真似しやがって！」

冗談じゃねえ、冗談じゃねえぞ。

本当にあり得ない。

相手が悪過ぎる。

「死ね！ 死んで償え！！」

「……………」

ぎゅ。ぼきゅ。

「え？」

とりあえず、目の前のバカが俺を指差してきやがるから折ってみた。

「!?」

他人には『ぎ』で始まって、『あ』で長く尾を引くように聞こえたであろう耳障りな絶叫。

それがすぐ傍にいる俺には『ぎ』の前に小さな『い』があったという、どうでも良い小さな発見が何故かおかしくて、ぷっ、と吹き出してしまう。

極端な話、あの赤髪は『いぎやあ』と言っているにも関わらず、他の人間には『ぎやああ』としか聞き取れないのだ。

耳の良い獣人……例えば師匠とかなら離れた所でもちゃんと『いぎやあ』と聞こえるのだろうか？なかなか興味深い現象だ。

いや、単純に音というか声が小さくて人間の耳では聞き取れないってだけの話だが。

「っーか煩いぞ」

俺はあまりにも喧しいので、ヒースを近くのテーブルの上に寝かせて赤髪のバカを殴った。

赤髪はあっさり倒れて蹲り、甲高い不気味な悲鳴をあげながらビクビクと震えだす。

それにしても、本っ当にあり得ない。侯爵家？ 侯爵家だと？ 冗談じゃないぞマジで。

ふざけてるとしか思えない。

貴族のくせにと思っただけで殴ってみれば、選りに選って侯爵ときた。貴族は教育が行き届いてるって話だったが、先生の過大評価だったとしか思えない。

あれで爵位第二位だってんだから恐れ入る。

「なあ、貴族様」

蹲る赤髪の背中にどっかと腰をおろし、右手で短い前髪を掴んで顔を上げさせ、左手で赤髪の左手首を掴んで引つ張り出す。

人差し指が見事に明後日の方に折れ曲がっていて、思わずうえつと顔をしかめる。

「俺の指、俺の指がああツち、ちくしょう、ああっ、なんて、なんて事をしゃがるんだテメエ!？」

「……なんだ、随分と余裕じゃないか貴族様」

右手で中指を握り、へし折る。

「ぎゃあああああッ!？」

「向こうのバカは気絶してるみたいなんだ。まずはアンタからだ……謝罪を」

「あぁッ！？畜生ッ……！なんなんだよッ、なんなんだよぉっ、いかれてんじゃねえのか！？  なんの恨みが有ってこんな事……！」

薬指、ねじるように。

「みぎいイヤッ！？」

その検討外れの声に思わず笑ってしまい、焦って噛み殺す。

「いやいやいや、真面目な場面なんだから笑わせないでくれよ貴族様。いま折ってるのは左手の指だぞ？それとも右回転だったって話か？」

「……………！……………！……………！」

赤髪は歯をむき出しにして食い縛り、目は飛び出しそうなほど見開いたまま、涙と鼻水と唾液を垂れ流し、ひゅーひゅーと呼気を震えるように小刻みに吐き出す。

俺は少しだけ待って、呼吸がいくらか落ち着いたのを確認してから、言葉を続ける。

「謝罪を」

「うわー、ミスった」

もしかしたら俺はこのバカ共よりバカなのかもしれない。

「ヒースが寝てるのを忘れてたぞ」

これじゃあ謝らせても意味が無い。俺に謝ったって、それは筋違いだ。

あくまでもヒースに謝らせないといけないのに、うっかり左手の指を五本とも折って謝らせた所で気絶させてしまった。これじゃあ後で謝らないとか言ってゴネたら、また指折りから再開しなきゃいけないかもしれない。

まあ魔法で治したから次も折って謝らせて、それから治せば済む話か。

あとこのバカも貴族なんだろうが、具体的な爵位を聞き忘れた。これで公爵とか言われたら俺泣くかも。

「まったく、いい歳した貴族のくせに謝罪もできないのか……おまえもそう思うだろ？」

そうやって俺は腰にさしたマーシエニクスを抜き放ち、頭上に振り上げる。

その直後、背後からの斬撃がマーシエニクスにぶつかり、甲高い金属音をたてた。

「後ろからの不意打ちなんて貴族様らしくないぞ？ 決闘の申し込

みは無しか？」

マーシェニクスを振り払い、背後から振るわれた刃を叩き返す。ゆっくりと立ち上がって振り返れば、さっきまで気絶していたはずの金髪の……今では顔にべっとりケーキのクリームが付着して、それを拭いきれずに酷い事になっている男が、憤怒の形相で剣を構えなおしている。

「黙れ下民！ 誰が貴様のような下衆に決闘など申し込みか！」

「ああ、アンタ決闘より暗殺派？」

貴族にも決闘や分かりやすい戦いを好む武闘派と、暗殺や策謀を好む暗躍派といるって話だしな。

「でも暗殺派なら不意討ちが失敗したら逃げるべきじゃないか？ いや逃がさないけどさ」

喋りながら、無警戒にズンズンと前へ出る。  
危険などない。

クリーム男が持つ剣は切っ先が揺れているし、握る手が震えている。肩から先は手首までピンと伸びて硬直し、腰は引けて足は開き過ぎだ。

強い弱いの問題以前に剣をまともに振れるのかどうかすら怪しい。クリ男は顔は怒り狂っているのに素人丸出しで、剣だけ無駄に装飾を施されたキラキラの剣なのが滑稽だ。師匠辺りが見たら指を指して涙を流しながら笑い転げるかもしれない。

「く、来るな！ 近寄るな無礼者！ 殺すぞ！？」

「近寄らないと斬れないぞ？ 殺すんだろ？」

怒ってるくせに警戒や不安、恐怖が強いのか斬りかかってこない。それどころか、どんどん後退っていく。

やはりまともに振る事も出来そうにない。発破が必要そうだ。

俺は立ち止まってマーシエニクスを鞘に入れ、優しく励ましの言葉をかける事にした。

「三つ数える間に来なかったら、四肢を斬り落として、目の前で赤髪を寸刻みに切り刻む」

『少しは殺気を出せ。ハツタリになってねえぞ』

『ちょっと駄犬、ラギに変な事吹き込まないでよ』

『今さらです。今さら過ぎます』

『Sモードのラギさんハアハア』

『『『くたばれ豚野郎』』』

.....。

「一っ」

「……………っ!？」

クリ男がびくりと震え、眼を見開く。

「二っ」

「……………うっ……………ひッ!？」

その最初の大きな震えを皮切りに全身が震え初め、歯の根が合わず、口からはガチガチと音が漏れる。

「三っ」

「うっ、うわああああッ!？」

奇声をあげながらクリが剣を振り上げ、斬り掛かる。が、話にならない。

「握りが弱い、脇が甘い、肩が固い、腰が抜けてる、踏み込みが浅い!」

クリが振り下ろすより早くマーシェニクスを抜き、剣の腹で五回、手首、腕、肩、腰、太ももを打つ。



「……ダメだな、こりゃ」

溜め息混じりの呟きと共にマーシェニクスを鞆にしまった所で、  
クリが崩れ落ちた。

## 第十話（後書き）

格好いい戦いとかを期待してた方、すんません。  
あと二話くらいお待ちを。

ちよい長くなりますが……。

自分はいわゆる、優しくて甘い主人公があまり好きではありません。  
やる事があるのに、押し強い女の子に押しきられてドタバタしながら流される系の主人公には自己投影できないんです。

もちろん目の前に困ってる人がいたら助けますが、余程の事情でない限りは最優先にしたりはしません。

ラギウスは家族や友人を大切にしますが、ずっと四人としか触れ合わなかったので、必要なら他の人間は簡単に切り捨てる事ができるキャラクターです。

一億の他人より一人の家族や仲間のが大事。

冷たい、冷酷というより、情が深いけど線引きが明快という感じ。  
根は愛情を注がれた良い子なので、良い人ではないけど良い奴です。

…どうなんだろ。

もう少し表現とか言動や考えを優しくするべきなのか…。

ご意見頂けるとうれしいです。

では、続きは夕方か夜に。

## 第十一話

「素直に謝る気になったか？」

俺は椅子に反対向きに座り、背もたれに両手を乗せてクリに問い掛ける。

打たれた箇所をおさえて丸まるクリは、目だけを動かして俺を睨む。

「こ、こんな事をして、生きて帰れると思っなよっ……もうすぐ……」

「そーゆーのいいから。貴族のくせに女殴りやがって。少しは反省しろ」

「ふざけるな！ たったそれだけの事で、このレイナード・ハインガスト・バズワルドに手をあげたというのか！？」

「最初からそう言ってるんだけど……あれ？ アンタには言ってなかったか？」

「いかん、これではただの暴力じゃないか……まあいいや、ただのケンカって事にしよう。」

「つーかそれだけの事じゃねえよ。ちよっとぶつかっただけで女子供を殴るなんて貴族のやる事か」

「……くだらん事を」

「あん？」

クリがフンツ、と鼻を鳴らし、俺を小馬鹿にしたように唇の端を吊り上げる。

「下民に女も子供もあるか！下民は我々に奉仕する家畜だ。我々に従って生きるしかない能無し共だ。そんな下民をどう扱うかなど、我々の勝手だろうが！」

「知らねーよそんな事。アンタの主義主張に興味なんか無いし。重要なのは、アンタが俺の連れを、それも女の顔を殴ったって事だ」

コイツらを見るに、もう貴族だのなんだので教育やら何やらを期待するのは無駄だろう。それならそれで構わないし、俺にはそれを矯正する気もその資格も無い。

ただし、落とし前はつけてもらおう。

「まあ別に殺すとかそんな気は無いし、素直に頭下げて謝れば許すさ」

まだ会って一日しか経ってないが、ヒースも基本的には良い奴だと思っし、謝りさえすれば許すだろう。むしろ恐縮してテンパるかもしれんが。

まあぶっちゃけ俺の気が済めばそれで良い。

「寝言をほざくなっ！余所見をしてぶつかったのはあの小娘だろうが！」

「お前が避ければ良かっただけの話だろうが。それに謝る女を殴るのが貴族様のやり方か？」

「何故私が下民の為に道をあけねばならん！それに下民の分際で私にぶつかっておいて、ただで済む訳が無いだろ！」

「女の顔殴ってそれだけ言えるんだから、大した神経してるよアンタ」

「ならば私が悪いというのか！？ 薄汚い下民にぶつかられて、友人が拷問されて、身体中を打たれた私が悪いと、貴様はそう言うのか！？」

「そうだろ？ 問答無用で殴った俺もアレだが。まあそこはお前の後にちゃんと謝ろう」

うむ、確かにいきなりケーキをぶつけて殴ったのは俺が悪い。ちゃんと頭も下げよう。

「貴様は……貴様は本当にどうかしてるんじゃないのか……！？ 貴族と下民を、平民を同列に扱うというのか！？」

「同じだろ？ 斬って捨てれば死ぬ。人種や仕事、立場の違いなんて些細なもんだろ」

少なくとも人間なら同じだ。良くも悪くも、皆平等で等価の存在の筈だ。

人によってその価値は違つかもしれないが、赤の他人なら基本的には平等に無価値なものだ。

そこに違いがあるとすれば、家族や友人のような何かしらの関係

を築いた相手との間に有る価値の違いだけだ。

人は自分にとって、不用だから人を殺す。

人は自分にとって、必要だから人を殺さない。

無価値の他人という存在を基準に、プラスかマイナスかを考えて、必要か不用か、邪魔か邪魔じゃないかで判断する。

だから今日会ったばかりとはいえ、知り合ったヒースに比べたら、名前も知らない貴族は俺にとっては無価値で、そこいらの一般人とかわらない。いや、今ではそれ以下だが。

ならどちらを優先するかは明白だ。自分にとってプラスである存在を傷付けたマイナスを許す理由など、あるはずがない……まあ大した傷じゃないから本人が許せば許すが。

そこまで話した所で、クリが突然叫びだす。

「狂っている！ 貴様こそ何様のつもりだ！？ そんな傲慢が許されると思っているのか！？ それにさつきは女を殴ったからだと言ったな！？ ふざけるなッ、貴様はただ自分が」

「ああ、ムカついただけだよ。気に入らなかつた。それが何か？」

『無抵抗の女子供に手をあげてはならない』

それはあくまで俺の価値観であって、他人に強制するような権利は無い。

が、目の前で気に入らないものを見せられれば、それに文句をつけるくらいはするぞ。

「まあ何だ、チンピラに絡まれたとでも思っただけで諦めてく」

「レイナード兄様！ これは一体……！？」

「兄様？」

クリと話している時に突然響いた女の声。

振り向いた先にいるのは青を基調とした上着に、ピッタリとした白いズボンをはいた女だった。

全体的な線は細く引き締まっているが胸はしっかりと存在を主張し、輝く長い金髪に意志の強そうな碧眼は掛け値なしに綺麗だと思ふ。着ている服が少し男物っぽく、男装の麗人という感じだ。呼び方から察するにクリの妹なのだろうが、兄と違って見る者の目を釘付けにする輝きとカリスマ性がある。

だが驚いたのはそんな事にじゃない。

ぱっと見は印象が違い過ぎて分からなかったが、間違いなく昼間にギルドの受付で会った女だ。前髪を下ろしてるだけで、一瞬別人に見えた。

名前は確か……………。

「リーリエ！」

そうだ、そんな名前だった。



「兄様、それにラギウスさん……一体なにが？」

「こんばんは、副長さん」

「リーリエ、この下民を殺せ！ こいつは私やノルバントを殺す気だ！」

このタコ、人が笑顔で挨拶したのに台無しだ。

ほらみる、なんかめっちゃ睨んでるじゃねえか。

「……ラギウスさん、どういう事が説明を」

ああ、やっぱり怖いなこの姉ちゃん。

気迫がクリなんかとは比べ物にならない。

「連れが殴られたから謝罪を求めてる所です」

そう言っただけ俺はヒースが横たわるテーブルを指す。

いい加減そろそろ起きてもいい頃だと思っただけだ。

「あれは……ヒースさんですか、お知り合いだったんですね」

「騙されるなリーリエ！ 見る！ ノルバントは指を滅茶苦茶に折られて気絶している！」

いちいち五月蠅い男だ。ぺらぺら話してないで、コイツの指も折っておけば良かった。

それに分かってはいたが、友人が指を折られてく所をこそこそ見て、隙を窺ってやがったな？

「確認してみればいいですよ。そっちの人の手を見れば、どっちが嘘つきか分かりますよね？」

まったく面倒臭い事になったもんだ。ここで彼女を敵に回したら、試験がどうなるか分かったもんじゃない。

「……………では確認させて頂きます」

そう言ってデコ…………改め、リーリエ副長はこちらにちらちらと視線を向けながらゆっくりと倒れている赤髪に近付いて行く。

「信用できないでしょうから、お兄さんからは離れておきます」

そう言って返事も待たずに俺は椅子から立ってヒースのテーブルの方へ歩き出す。

昼間話した限りではクリよりは話が通じそうだったし、ここで印象付けをしておくのも悪くない。昼間に少し失礼な態度をとったのも有る。

「……………」

リーリエ副長が何かを言おうとして、そのまま口を閉ざす。何を言おうとしたのか、少しだけ気になった。

わずかな沈黙の後、赤髪の傍にリーリエ副長、その近くにヒースと俺、少し離れた所で未だに地面に転がったままのクリという、二等辺三角形の立ち位置となった。

「兄様、指というのは手の指ですか？」

「そうだ、どちらかは見えなかったが、間違いない」

「……どちらも折れてはいませんが」

「なんだと!？」

当たり前だ。

そうでなかったら、こんな自信満々に振る舞うか。

「そんなバカな事があるか！ ちゃんと確認しろ！」

「……何度見ても、折れてなどいません」

「これで分かってもえましたか？」

もつとも、あの赤髪が気を失ってる時点で、まともな説得な訳がないのは一目瞭然なんだが。

「自分も連れが殴られて熱くなってしまうましたが、さすがにそんな酷い事はしません。なんならヒーースとその人が起きるまで待つても構いません」

それもこう言っておけば角はたつまい……それに赤髪が起きた所で証拠の指は治してあるし、自分達の有利なように証言しているだけと思うだろう。

……我ながら汚い話だ。反吐が出る。

こんな汚い茶番を演じる事になった苛立ち。これはいずれクリにぶつけてやるぞ。

「……………わかりました」

そう言ってリーリエ副長は立ち上がり、俺に向けて深々と頭を下げる。

「疑って申し訳ありませんでした。ここはどうか私に免じて、お怒りを収めて頂けないでしょうか？」

「リーリエ！？ 兄を信じないのか！？ 下民に頭など下げるな！」

信じるもくそも、証拠が無いんだっつの。

「お兄さんの言う通りです。顔を上げてください。副長さんにそんな事されても、自分は嬉しくありません」

ああ、嬉しくない。全く嬉しくない。

昼間と同じだ。自分がひどく汚い小物みたいで嫌になる。いや、みたいじゃなくて、やってる事は完璧に汚い小物か。

「ですが……………」

「疑いが晴れたならそれで良いです……………ヒースには自分から言っておきます」

ああ、アンタがお人好しだったって伝えておくよ。

アンタは本当に美人で貴族のくせに、公平な良い人だ。

「ふざけるなよ貴様！リーリエ！その男を殺せ！バズワルド家の顔に泥を塗ったのだ、生かして帰すな！」

「兄様」

「……ッ!？」

リーリエ副長の一喝にクリが硬直し、言葉を失う。

本当に、どうしてこの男はこうも威厳が無いのか。仮にも侯爵家の嫡子だというのに。いや、リーリエ副長が特別なのか？

「お願いですから……もう、やめて……」

手を固く握り、俯いて声を絞り出す。

そんな彼女の姿が何故か俺の胸に突き刺さり、酷い痛みと吐き気に襲われる。

なんだよこれ。意味がわからん。

どうしてこうなった。

こんな事なら指を治さないで、二人をボコボコにして、素直に成敗されたほうが良かったようにすら思える。

『あとは優しく付け入るだけね』

『……俺ア女を泣かすのは感心しねえぜ』

『ラギ、嘘をつくなら、それに動じぬ心を持ちなさい。さもないと辛いだけですよ?』

『ラギさん……自分の信じるままになさい』

## 第十二話（前書き）

更新遅れてすいません、長く体調を崩してました。

投げ出してないよー！

もし少しでも楽しみにしてくれてる人がいたらと思つと申し訳ないので、編集等は後日にまわして、なんとか話を先に進めたいと思います。

だいぶ粗い文章や展開になるかもしれませんが、どうかお許しを。

誤字脱字の報告、感想等を頂けたら幸いです。

## 第十二話

……………さて。

ここで一度冷静になってみよう。  
何があったか。

ヒースが殴られる 殴ったクリを殴った 連れのバカの指折って  
治した クリは貴族のバカ息子でリーリエ副長の兄だった 揉めて  
試験に支障が出るとまずいから嘘を吐いた リーリエ副長が治した  
指を確認 クリが喚いてリーリエ副長がとめた リーリエ副長が何  
故かシヨンボリ。

いかん、ダメだ。全く意味が解らない。

リーリエ副長は、いったい何がそんなに辛いというのだろうか？

兄が嘘を言っていると思うのが辛いのだろうか？

それとも侯爵家の嫡子たるものが無様な姿を晒している事だろう  
か？

もしくはその両方が、あるいは別の理由からか？

まさか、まさかとは思いますが、実はちょっとおかしい人なのかもし  
れない。

昼間話した感じではそこまで変には思えなかったが、万が一とい  
う事もある。

いや、そもそも何が正常で何が異常かなんて、昨日今日森を出た  
ばかりの俺に判断できる訳がない。

……………とどのつまり、あまり関わるべきじゃないって事だろう。も



う手遅れっばいが。

「……それじゃあ、俺達はこれで失礼します」

面倒臭え、もう逃げちまおう。

関わってしまったものは仕方ない。あとは可能な限り早く撤退するだけだ。

「……ええ、申し訳ありませんでした。お詫びは明日にでも必ず」

「いえ、もういいですから、副長さんが謝らないでください」

いやもう本当に。

アンタが謝ったり悲しそうな顔する度に、こっちは罪悪感で胸がもやもやするんだ。

「……………」

無言で俺を睨むクリの事は無視して、俺はテーブルの上で寝かしていたヒースの背中と膝の裏に腕をまわし、一気に抱えあげる。

軽い。小柄で細いから仕方ないが、普段ちゃんと食事を摂っているのか心配になる軽さだ。

そして柔らかい。あと良い匂いがする。ここ重要。

「それじゃあこれで」

それだけ言い残し、返事を待たずに出口に向かって歩き、

足を止める。

「兄上？」

「クリがなんと言ったか聞こえなかったのであろっりーリエ副長が首を傾げる。」

「……………よく聞こえなかった。もう一度言ってみる」

聞き違いだろうか？

もしそうでないなら、このバカは今、

「お前もソイツも、必ず殺してやる」

ああ、どうやら聞き違いじゃなかったみたいだ。

めんどくせえ、本当にもう、勘弁して欲しい。

「いま終わってたよな？ このバカが黙ってれば、それで終わってたよな？」

「貴族って奴はどうしてこう……………いや、このバカが特別なのかもしれないが。」

「お前達だけじゃないツ、家族や友人もだ！」

「兄上、お止めください！」

「バズワルド家の力を舐めるなよ!? 下民などどうとでもなるんだからな!!!」

「兄上!!!」

溜め息を漏らし、ヒースを再び近くのテーブルに寝かせる。

とても母さん達を殺せるとは思えないし、友人はいない。

しかしヒースはどうだろう?

ヒース自身や家族、友人がこのバカの、あるいは俺のせいで危険に晒される事になるのだ。

仮にも侯爵家ならそれを実行するくらいの力は有るだろう。

故に、負け惜しみや捨て台詞の類いと捨て置く事はできない。

困った。本当に困った。そんな事を言われたら、

「ラギウスさん!?!」

今ここで、確実に殺さなきゃいけない。

なかなかどうして、悪くない連撃だったと思う。

全力だったかと言われれば、鼻で笑ってしまうくらいの加減ではあったが、だからこそマーシェニクスを鞘から抜いてそのまま斬り伏せる筈だったそれは、気負い無く、淀み無い滑らかな動きだった。

師匠によく「もっと力を抜け」と言われるので自覚してはいるが、俺の戦い方は力任せで荒削りで、スピードは有っても流れるようなスムーズな動きが出来ていない。

もしかしたら、成長に向けて大きな一歩だったのかも知れない。今の感覚を忘れないうちに、軽く反復訓練をしたいものだ。

最初の踏み出し、左手を鞘に添えて疾走、最後の一步と同時にマ―シエニクスを抜き、そのまま横風ぎに一撃し、さらに一步踏み出して両手で追撃の斬り下ろし。

一連の動きを全力で出せるようになれば、師匠にも多少は認めてもらえるかもしれない。

いや、全力ではダメなのだろうか？ 力を抜けという事は全力になつてはいけないという事なのだろうか？

手を抜かず、かと言って全力でもない力加減で、実戦の中で繰り出せるようになれという事だろうか？

……難しい。

師匠との訓練では常に全力で動き、全力で受け、全力で振つていた。

全力でないと師匠の動きについていけないし、全力でないと武器や盾ごと吹き飛ばされるし、全力でないと逆に自分の武器ごと斬られてしまう。

……難しいな。

全力で戦っても全く歯が立たない相手に、あえて全力を出さない

で戦えというのだろうか？

それは自殺行為のような気がしてならない。

あるいは全力でもあの動きができるよう、何度も繰り返して身に付けるのが重要という事だろうか？

師匠は大切な事はギルルルルとかズバーンとかドドドツとか意味不明な言い方でしか教えてくれないから分からない。

もし全力でやるとしたら、もっとこう動作の一つ一つを

「ラギウスさん」

.....。

「剣を引いては頂けませんか？」

さて、どうしたもんか。

一撃目、クリの首を斬り飛ばす筈だったそれはリーリエ副長が投げたナイフによって妨害された。

そして二撃目、クリの頭蓋を両断する筈だったそれは、彼女の湾曲した細身の長剣によって受け止められていた。

早いな、と思う。

後から動いておいてナイフ一本でこちらに追い付くとは思わなかった。

剣はどこから出したのだろうか？ 彼女は剣を持っていなかった筈だ。

そして驚いた事に、全力ではなかったとはいえ、自分の剣を止めたのは彼女の剣の切っ先に近い部分だ。

長剣は彼女の身長より少し短いくらいの長さだろうか？

彼女自身が小柄でない事も考えればかなり長い剣だ。そして攻撃を受け止め時に、当たり前だが切っ先に近ければ近いほど、手から遠ければ遠いほど強い力が必要になる。

その速さと力を考えれば結論は一つしか無い。

つまり強いのだ、彼女は。

「それは無理な相談だと思わないか？」

もう敬語を使う必要もないだろう。

「ここで殺さないと、後が面倒だ」

剣に力を加える。が、ピクリともしない。

どんな怪力が有ればこんな芸当が出来るのか。

「それともアンタが止めてくれるのか？ そのバカがこっそりゴロツキを雇って俺達の関係者を襲わせるのを防げるのか？」

「それは……………」

「当然、不可能だよな？」

出来ない。出来る訳がない。

「……………仮にも侯爵家嫡子を、ギルド副長の私の前で斬れば、どうなるか分かっていますね？」

侯爵家ほどの貴族に手を出せば間違いなく不敬罪……………まあ殴った時点で手遅れだろう。

ましてや殺せば追われる身となる。ギルド登録など夢のまた夢だ。

「……………困ったな」

本当に困った。

それくらい分かっていた筈なのに、どうして俺は貴族に手を出してしまったのか。一時の感情に流されるとろくな事がない、という事か。

「今ならまだ不問にします。だから、剣を引いてください」

兄が殺されそうになったというのに、お優しい事だ。

「……………妹さんはこう言ってるけど、お前はどう思うね？」

本当に、茫然としてマヌケ面晒してるこのバカの妹とは思えない。

「……………ッ！ 何をしているリーリエ！ さっさと殺せ！」

決まりだな。

「マーシエニクス！」

## 第十二話（後書き）

たまーにね？

頭の中で練ってた展開に持っていく事ができなくて死にそうになるの。

なんで自分は会話とかちゃんと作れないんだろ。

.....どうしてこうなったorz



## 第十三話（前書き）

ちと短いですが、一旦句切ります。

あと街の形とか何カ所か変更編集しましたが、大して重要な所でもないのをお気になさらず。

## 第十三話

リーリエ副長の長剣が届かない間合いまで後ろに跳躍し、同時に連接蛇腹剣となったマーシェニクスをクリに向けて繰り出す。今度は本気の、瞬きする間も与えず、確実に殺す全力の突きを。

「はあっ！」

それは予想通りリーリエ副長の長剣によって阻まれる。故に動揺する事なく、伸ばしたマーシェニクスによって追撃を行う。地を這うような横風ぎ、袈裟切りの斬撃、背後からの刺突。しかしそれらはかすり傷一つ付ける事も叶わず、リーリエ副長によって迎撃された。

「ラギウスさん、やはり引いては頂けないんですね？」

なにを寝ぼけた事を。

「そのバカを放っておけないのは解るだろ？」

「どうしてもですか？」

「ああ、どうしてもだ」

少なくともクリが撤回しない限りは。いや、撤回しても信用できない以上は無理な相談というものだ。

「……………そうですね」

リーリエ副長が俯き、呟く。

「よりによつて、こんな時に……………」

「なに？」

「こんな時？ なんの話だ？」

「残念です」

言葉とは真逆の、歓喜の笑みとしか思えない壮絶な笑みを浮かべながら、リーリエ副長が前に出た。

俺は焦りに引きつった笑みを浮かべながら、近くにあつた椅子を掴み、投擲する。

ゆっくりと山なりで投げられた椅子。

クッションが効き、落ち着いたデザインだが逸品なのが一目で分かるそれが、リーリエ副長の顔と俺の顔を遮った瞬間、椅子を貫き、椅子の数倍の速度でマーシェニクスの切っ先がリーリエ副長に迫る。

「ふっ！」

鋭い呼気と共に放たれた下段からの切り上げで、マーシエニクスが弾き上げられる。

そのまま素早く前に踏み込むリーリ工副長の眼前に椅子が到達した時には、椅子が幾つもの細かな木片と布切れに変じていた。

「さあ、これで追い付きましたよ！」

「おお、待ち兼ねたぜ！」

嘘だ。強がりだ。冷や汗がとまらない。

俺は実にあっさりと、本気で後悔する事になった。

少し前の、リーリ工副長が危ない人なんじゃないかという失礼な考えが当たっていたのだ。驚くべき事に。

爛々と輝く見開かれた瞳、強くつり上がった唇。

ヤバイ人だと気付いた時にはもう遅い。

しかもそれが自分より強い相手となれば尚更だ。

地を這うような低さを凄まじい速度で疾走し、太刀筋すら見えな  
い刃を振るう怪物。

フェイントも全力の攻撃も等しく無力化する彼女を相手に、俺に  
できた事と言えば、後退して距離を取りつつ彼女の前では攻撃とも  
呼べぬ牽制を繰り返す事くらいだった。

そしてそれも、もう終わりだ。

もう彼女と俺の距離は目と鼻の先。腹を据えるしかない。



## 第十四話

俺の周囲を回る幾つもの刃がリーリエ副長の長剣にぶつかり、耳障りな金属音を撒き散らす。

高速で途切れる事なく繰り返される音は、もはや一つの音が長く尾を引いているかのようだ。

いまリーリエ副長が長剣で防いでいる刃の輪は三つ。

その輪と輪の間からリーリエ副長の歓喜に輝く瞳を視認し、俺も笑みを深め、左手に意識を集中する。

一番最初にイメージするのはリング。

次に掌にリングと同じぐらいの大きさの透明な球体をイメージする。

そこに自分の生命力を注ぎ込み、熱を与え、球体の炎をイメージする。

加える生命力を増やし、それが一定の量を越えた瞬間、魔法が発動する。

俺の掌に突如出現した火球に、リーリエ副長の顔が一瞬だけ驚愕のそれに変わる。

美人つてのは得だな。驚いてる顔さえ絵になるんだから。

そんなくだらない事を考えながら、火球を放つ。

「素晴らしい！これが貴方の魔法ですか！」

素晴らしい？

2秒で放てる初歩的な魔法の何が素晴らしいというのか。

そら、案の定後ろにステップしたリーリエ副長が振るう剣で寸断されて散った。

……………それでも、どうやら得るものは有ったようだ。

「マーシエニクス!!」

連接蛇腹剣をツインブレード……………一本の剣を柄尻で繋げたような、柄の両側から刃が伸びるそれに代えてリーリエ副長に迫る。

リーリエ副長も俺に因應するように再び前へ。

「はあッ!!」

柄と両側に伸びた刃。その全長を合わせればリーリエ副長の長剣とほぼ同じくらいの長さになるだろうが、それ故に、こちらの攻撃が当たる距離に入るよりなお早く、リーリエ副長の剣閃が銀色の光糸となって眼前に奔る。

俺はそれに向けてツインブレードを掲げる。

甲高い音と恐ろしいほど強烈な衝撃と共に逆手側の刃によって長剣が止まる。

それが予期していた箇所に来た事に俺は微笑し、さらに前へ。

一瞬の停滞の後、剣閃が続けざまに放たれるが、その全てを受け止めてひたすら前へ。

言うまでも無いが、彼女の剣がどれほど長く、どれほど早くとも、それは手に繋がっている。

そして剣を振るうには無数の動きが必要だ。

大雑把に言えば、上半身の関節なら首、肩、肘、手首、手の指。  
下半身の関節なら腰、脚の付け根、膝、足首、足の指。  
そして各所に纏う筋肉。

剣を振るう以上、それらの動きを消すのは不可能だ。

よしんばその動作を削り、速度によって補おうとも、動きの起り、僅かな初動を消すのは困難を極める。

ここまでの牽制と先程の火球を寸断する斬撃により、その僅かな動きを見て捉え、確かに在るのを知覚した事で、打ち合うのは無理でも防ぐ事はできると踏んだのだ。

しかも彼女の剣技は美しく正しく素直だ。

故に予想外の方向から来ることはなく、線と点としての攻撃しかない。

師匠のように初動すら知覚できぬ速度で予測不可能な方向から来る訳でもなく、マスターのように初動を完全に削り、気付いたら剣の切っ先を突き付けられている等という事もないのだ。

僅かな初動を捉えて防御するには一瞬たりとも気を抜かず、全神経の集中を必要とするので疲労が凄まじい。

しかも一撃一撃の重さが手を痺れさせ、受け止める度に視界が狭くなるようで、神経が一撃毎に摩耗していく

だがそれでも、死ぬのに比べれば、どうって事は無い。



自分より強い相手と恐れているには戦えずとも、彼我の死を覚悟して挑めば、戦えぬ相手ではない。

そしてなにより、なにも知覚できないまま切り刻まれるのには慣れている。

なら……初動が知覚できる剣を恐れる理由がどこに在る！

「オオオオオオツ！」

「ぐっ!？」

剣閃を掻い潜り、首を狙って振るったコンパクトな一撃が紙一重で回避される。

リーリエ副長が一步引き、それを追うように大きく踏み込み、胸の中心へと突きを繰り出す。

長剣によって横に流されるのに合わせてさらに一步進み、手首の動きでツインブレードを反転。

逆手側の刃がリーリエ副長の側頭部に迫るも、リーリエ副長が素早くしゃがんだ事で空を切る。

眼下、しゃがんだ勢いを殺さずに素早く回転し、背中を見せるリーリエ副長。

靡く金髪が光を反射して輝き、粒子を放つようだ。

その髪的美しさに一瞬だけ心を奪われ、我に帰って慌てて足を狙

つた一撃を跳躍で回避し、その瞬間にしまったと後悔する。  
跳躍した俺の足の下を通過したのはリーリエ副長の長い脚。  
そして本命の長剣は俺の胴体を薙ぎにくる。  
通常の剣閃より数段遅い、しかしタイミングと体勢的に絶対にか  
わせない一撃だ。

「マーシェニクス…！」

ツインブレードの片方の刃を消し、もう片方の刃の長さをその  
ままに、幅20センチ、厚さ2センチの大剣に変える。

その広く分厚い剣を盾に、長剣を受け止め、

「ぜいつ、やあああああああ！」

「うおおおおお！？」

きれず、大剣ごと剣の勢いと怪力によって吹き飛ばされる。

忘れていた。

彼女の剣は早い、それを可能としているのは恐らくこの怪力だ。  
偶然避けたは良いが、さっきの足払いも当たっていたらどうなっ  
ていた事が。

って違う！

そんな事を考えてる場合じゃない！。

「こっちはまだ空中だ、この好機を逃してくれる相手じゃねえ！」

「はあああああ！」

来た。

着地するまでの数瞬、あるいは着地と同時に襲い掛かる剣閃を防ぐ術は無い。

なら、

「止ッ、まあ、れええええええ！」

彼女の前進を止めるしかない！

掌のイメージは架空の猛禽。

それに一瞬で注ぎ込めるだけの生命力を叩き込み、熱ではなく切り裂くような冷気を与え、発動。

「……………な!？」

さっきの火球とは全く違う、リーリエ副長の本気の驚愕の気配に、喜びにも似た爽快な感情が胸に湧く。

そしてその驚愕によって得られる一瞬の時間だけで充分だ。

眼前には俺の生命力を糧に出現した猛禽の氷像。

その大きさ、胴体部分だけで実にリーリエ副長の身体を越えるほど。

翼を広げれば横の全長は6メートル近いだろう。

そして鋭すぎる嘴と爪を構え、ナイフのような羽毛で構成された翼を羽撃かせ、この世界に存在しない空想上の怪鳥が飛び立つ。

炎では彼女の剣閃を止められず四散する。

ならば氷ならどうか？

たとえ剣閃に断ち割られようとも、生命力を魔力に変換し、その魔力によって構成された氷刃はすぐには消えず、慣性に従う。

つまり両断しよう寸断しようと、細かな氷刃となって彼女を襲う。

俺はリーリエ副長と氷の猛禽がぶつかるのを待たず、大剣を大理石の床に叩きつけて無理矢理着地し、

「マーシエニクス！」

そのまま大剣を自分の身長と同じ長さの剣にする。

剣と言っても、実際には全体の二割程度が刀身で、残りの八割は長柄なので槍と言った方が正しいだろうが、マーシエニクスが剣にしか成らないならこれも剣なのだ。

柄の半ばを左手で、柄の端を右手で握り、両足に残る力の全てを込める。

ぐらりと一瞬視界が歪み、立ち眩みの様な状態に陥るが、今の魔法に生命力を使い過ぎた為だろう。

唇を噛み、目を見開く。

右でも左でも良かったが、前に有ったので左足を選択。身を屈め、左足に渾身の力を込めて大理石の床を蹴り、踏み砕き、前に跳躍する。

「どうする！ 避けるか！？」

いいや、それは無いね。

何故かは分からないが、それだけは確信が持てる。

彼女はこの戦いを楽しんでいる。この局面に在って、避けるなどという選択肢は有り得ない。

「笑止！」

そら、女神のような笑顔で氷の猛禽を迎え撃つ！

「……………！」

轟音。

氷の猛禽は彼女の繰り出す拳によって、粉々に粉碎される。

殴り潰しやがった…！？

しかも無傷だ。本当に化物かよ。  
ダメだ、もう前に飛んでしまった。もう突っ込むしかない。

……さすがに死ぬかもしれない。もし死ななかったら、俺は彼女を殺す事になるのだろうか？

そういえば人間を殺すのは初めてだ。きっと一生忘れられないだろう。

目を閉じる度に、彼女の顔を思い出すのだ。

あんなに美しい彼女が、死ぬまで一緒に……ああ、それは、なんとという甘美な祝福だろう。

粉碎され、光を反射する微氷に包まれながら彼女が笑う。

その光輝く空間はもはや神々しく、微笑む彼女は女神のようだ。

ああ、本当に、本当に　　！

「　　」

## 第十四話（後書き）

戦いが手短過ぎますかね？

まあ現状では戦力差の関係で短期戦しか無理ですが。

説明や描写をもっと減らしてスピーディーにするべきか……うーん、  
どうしたもんか。

あと最後の台詞は予想しやす過ぎるかな。

さてさて、次はリーリエ副長視点ですぞ、っと。

## 第十五話（前書き）

日間ランキングどうしてこうなった……。偶然が重なったにしても何がなんだか……。プレッシャーでお腹が…。

更新遅くなってすみません。

今回は敢えて癖の強いごちゃごちゃした回にしました。

これでダメっぽいと思われる方は、お気に入り解除して頂ければと思います。



## 第十五話

人には誰しも欠点や悪癖という物があります。

例えば4歳上の兄、レイナード兄様は我慢や節制を嫌い、自分に甘く他人に厳しいところがあり、酒癖が悪く、他人の持ち物を欲しがります。たまに私を変な目で見てきて無意味に肩や腰を触られるのにも困ります。

2歳上の兄、カート兄様は知性溢れるお優しいお方なのですが……なんと云うか、その、貧民街の……ばっ、売春婦に……目がありません。他は非の打ち所のないお方なのですが……。

もちろん私にもあります。

私の場合は剣を振ること。正確に言えば強い相手と戦い、斬る事に強烈な興奮や快感を覚える事でしょうか。

それが分かったのは10歳の時でした。

別に物語のような特別な話じゃありません。

貴族の娘らしく父上に従って、毎日を教育と習い事で作業的に過ごし、偶然二人の兄が剣の修行をしているを見て自分も真似したら気に入って、あとは両親と兄様達の剣の師にお願ひしてなんとか修行に混ざる事を許された後、ある日レイナード兄様の狩りに同行し

たら魔物に囲まれて、戦ったら目覚めてしまったというだけの話です。

父上は私が剣を握るのを嫌がっていました。他の事に何の喜びも見いだせなかった私には、剣を置いて元の生活に戻る事はできず、隠れて剣を振っていました。

ある日、父上が私に縁談を持ち掛けました。

相手は病で奥方を亡くした30も年上の男性で、バズワルド家と同格の侯爵家の方でした。

家柄と領土や財産以外に何一つ良いところの無い殿方で、以前に一度だけ会った事があるけれど、背は低いのにまともに歩けぬほど肥って肉に埋まった身体、ハゲちらかした頭とねばつくような視線、そして「ヌプププ」という笑い声が特徴的な人でした。

……どう、言い表せば良いのでしょうかね。

『目の前が真っ暗になる』とか、『足元が崩れていくような』というのも生温い、おぞましい感覚。

私とてバズワルド侯爵家の娘。好いた相手がいっても添い遂げる事など出来ないのは理解していますし、家の為に一生を捧げる事には疑問も不満もありません。

ですが……ですが、余りと言えば余りではありませんか。

聞けば亡くなった奥方も若い方で、嫁いで以来ろくに寝室から出してもらえず、一日中部屋の中から呻き声や泣き声が聞こえていたとか。

拳げ句、荒淫の末の懐妊に自分の子供ではない可能性があるると罵倒され、子供が流れて病に臥せ、誰とでも寝る淫売と罵られながら亡くなったのだとか。

……なにも贅沢を言うつもりはありません。好きでなくとも、身も心も捧げる覚悟は出来ています。

疎まれず、子供を愛してくれて、たまに剣が振れば充分です。

ですが、とてもそれが望める殿方とは思えません。

……いえ、はっきり言ってしまうえば、性奴隷にされるとわかっていて、そんな縁談に喜べる訳がありません。

我がバズワルド家はサザンフィード王国内では強い力を持ち、領地も肥沃でここ数世代は財政難に喘ぐ事も無かったはず。

ならば已むにやまれぬ事情ではなく、正しく政略結婚であると思われるべきでしょう。そして父上が娘の女としての幸せなど考えていないのも分かりました。

多くを望まず、ささやかな幸せが得られれば良いという思いも、しかし現実にはそれすら望むべくもない。

同時に、バズワルド家に生まれた娘の責務であり、飢えず餓えず様々な教育を受けられたのだから、その代償を支払わなければならぬとも理解していました。

私はあの醜悪な肉ダルマに売り飛ばされ、身も心も魂までも凌辱されるのだ。

自分の未来を思うと、涙がこぼれました。

その時でした。

『かなしい？　かなしい？』

それは守護者の神、アエneas様の声でした。

優しい彼女は代々我が家の守護神として崇められ、私が幼い頃からずっと見守っていてくれて、私が辛い時にはいつも慰めてくれました。

『にげちゃえ！　にげちゃえ！』

もちろん、そういう訳にはいきません。自分にしか果たせぬ勤めなのでありますから。

『にげるの！　にげるの！』

それは初めて聞く、頭が痛くなるほどの大きな声でした。

『じじじいー！　じじじいー！』

じじい……たぶん私や兄様達の剣の師であり、今はネフロにある冒険者ギルドのギルド長であるニカノール先生の事でしょう。

ニカノール先生を頼れというのでしょうか？

『はやく！ はやく！』

アエネアス様の声と共に突然視界が光に包まれ、光が収まると目の前には白いチエスの駒のような物が有りました。

六枚の翼を持ち、鎧を纏う女神の駒。

それが代行者の神像と呼ばれる物なのはすぐに分かりました。手に取ってみれば、身体が軽くなり、全身に力がみなぎるようでした。

そしてその日、私は自分の力を試したいという欲求に抗えず、屋敷を抜け出してネフロに向かいました。

ニカノール先生を頼るのは賭けでした。

先生は高齢ですが父と親しく、最悪身柄を拘束されて家に送り返される可能性が有ったからです。

しかし先生は事情を聞くと笑顔で頷き、私の身分を隠して偽名でギルドに登録し、冒険者として生きる道を与えて下さいました。

それからは先生の紹介で信用できるパーティーに加えてもらい、ギルドの依頼で生活の糧を得て、冒険者として生活するようになったのです。

それは夢の様な日々でした。

見るもの聞くもの全てが新鮮で、仲間という存在も、自分の力で生きているという実感も、私にはこの上なく心地好いものでした。

そして剣を存分に振るえる環境。

レッドキャップの頭を帽子ごと踏み潰し、ミノタウロスの四肢を斬り落として腹を裂き、サーペントを輪切りにし、マンティコアを部分毎に分解し、オーガを両断する。

それらの血を浴び、断末魔の叫びを聞き、臓腑に触れる度に骨まで蕩けるような悦楽に震えました。

ああ、私はなんと無駄な時間を過ごしてきたのでしょうか。

この生活に比べたら、貴族としての生活など拷問に等しい。

私に相応しいのはドレスではなく鎧であり、楽器を奏でるより剣を振るい、花を摘まずに命を狩り取るべきなのだと確信しました。

冒険者になつてから半年が過ぎた頃、ギルドで妙な事が起きるようになりまして。

新人の冒険者が簡単な採取クエストで何者かに襲われたり、明らかに報告より強い魔物と遭遇したり、魔物の群に襲われているという村に行けばそんな話は知らないと言われたり、冒険者やギルド職員を名乗る者達が市民に暴行を加えたり。

次から次に発生するトラブルにギルドは対応しきれず、ギルド内の雰囲気は荒れ、ニカノール先生やギルド職員の皆さんは疲労の色を隠せなくなっていました。

それは冒険者達も同じで、繰り返される妨害や嘘の依頼と本当の依頼に奔走し、疲労困憊の状態でした。

そんな状態でまともにクエストを達成できる筈もなく、次々に負傷者が続出し、動けるのは私を含む一部の冒険者達だけになりました。

……………その日、私は酷く、嫌な予感がしました。

先生やギルド職員の皆さんは目の下に濃い隈を作り、私はギルドの食堂でテーブルに突っ伏していました。

続出する負傷者とネフ口を去る者達……………もう完全に限界でした。

……………これからどうなるのでしょうか。

私がそう呟こうとした時、隣のテーブルに誰かが座りました。その誰かを見て、愕然としました。

「父上……………」

ネフロとバズワルド家の領地はそれなりに離れているはず。  
どうしてここがバレたのか。  
どうして父上がここにいるのか。  
どうして私はネフロを出なかったのか。

どうして、どうして、どうして、どうして、どうしてどうしてどうして  
うしてどうしてどうして……！？

気が付けば恥も外聞もなく、不様に嘔吐していました。

もうおしまいだ。

バズワルド家は精強な軍隊を有しています。居場所がバレた以上、  
父上はどんな手段を用いても私を連れ戻すでしょう。

あとはただ、肉ダルマの肉奴隷となる運命だけが待ち受けている。

「最近ギルドは忙しいそうだな、リーリエ？」

「父上……」

「新人への闇討ちはともかく、緊急性の高い嘘の依頼……本来ギル  
ドに依頼を出せるのは身元の確かな者だけの筈なのにこの事態。そ  
りゃあギルド職員も冒険者達も荒れて街の人々に当たり散らす訳だ  
……」可哀想に「

「まさか……父上！？」



私一人を連れ戻すために、そんな事……。

「ああ、可哀想になあ………悪いのは全部、お前とニカノールだ  
というのに」

「父上！！ 嘘の依頼のせいで救援が間に合わず、魔物に滅ぼされ  
た村もあるのですよ！？」

「全てお前の責任であろうが！？」

……！？

「バズワルド家の面汚しが！ お前の我が儘がこの事態を招いたの  
だ！ お前がその村の連中を殺したのだ！」

違う！ 私じゃない！

「お前は逃げたのだ！ 意に沿わぬ縁談が嫌で、バズワルド家の娘  
としての責務を放棄し！ あまつさえニカノールを頼って無関係の  
者にまで累を及ぼした！」

わたしは、わたしは………っ！

「お前のような禍を撒き散らす者をなんと呼ぶか知っているか？  
人はお前のような者を魔女と呼ぶのだ」

……ちがう、まじよなんかじゃないっ、わたしはっ、わたしは…  
…！

「己の欲望のままに動き、周囲の者を不幸にする薄汚い魔女め！」

ちが、うつ……わた、しッ……まじよなんかじゃ、ひっく、ないっ……ッ！

「お前のような恥知らずが私の娘かと思うと狂いそうになる……もういい、帰るぞ！　すぐに婚姻の支度をするのだ！」

やあつ、やだあッ！かえりたくない！

「ええい、煩わしい！　子供でもあるまいし泣く……な！？」

『リーリエないてる！　リーリエはなせ！』

かえりたくない！　あえねあすさまっかえりたくない！

「バカな、アエネアス様だと！？　何故お前などを！？」

『リーリエいつしょ！　リーリエかえらない！』

「何故ですか！？　私はバズワルド家とアエネアス様のために……！」

『かえれ！　かえれ！かえれ！　かえれ！』

「ぐっ……！！」

「リーリエも泣いとる。そのくらいにしておけ」

「ニカノールっ、貴様いつから……ええい、もういい！　お前など知らぬ！」

気が付くと、私はニカノール先生の部屋で寝ていました。  
その後、ギルドへの嘘の依頼や妨害は無くなり、通常の状態に戻るのに長くはかかりませんでした。

私はニカノール先生に誘われてギルドの職員となり、先生や他の職員、冒険者の皆さんや困っている人々を助ける為に寝る間を惜しんで働き、時には私が偽名で依頼を受けて魔物を討伐したりもしています。

これで良い。今はそう思います。

私のせいで多くの人々に迷惑をかけてしまったし、もしかしたら償う事もできないかもしれないけど……出来る事をやろうと思います。

もう逃げないで、子供のように泣いて駄々をこねるだけじゃなくて、自分に出来る事をやる。

今はただ、それで良いと思います。

よく分からない事になりました。

昼間の彼……ラギウスさんと、久しぶりに会う予定だったレイナ

ード兄様が揉めているようなのですが……もう何がなんだか。

つい今し方あんな報告を受けたばかりだというのに……どうしてこんな時に。

しかも彼の機嫌を損ねないようにと昼間に決めたばかりだというのに……レイナード兄様、お願いですから黙ってください。

それにしても彼の懐の魔力……まさか代行者？

しかしそれにしても強すぎる。

彼はいつたい……。

仕方ないんです。

彼を貴族殺しとして指名手配なんてしたくないし、レイナード兄様を死なせる訳にもいきません。

アエネアス様も最初は戦ってはダメと強く仰っていましたが、今までにないほどの力を与えてくださっています。ごめんなさいアエネアス様。

だから口の中、頬の内側がキューっとなって唇の端がつり上がるのも、仕方ないですよね？

彼には本当に驚かされます。

動きだけを見れば代行者のそれでないのは間違いないのですが、あの形が変わる剣を巧みに使いこなして対抗してきます

何より魔法を使ってみせてくれた。

魔法には二種類あります。

一つは己の崇める神に祈り、その力を貸して頂く魔法という名の奇跡。

こちらは使用者への負担が軽いものの、使える魔法が神の力に依存し、祈り願うか、代行者ならば念じるだけで使えます。

もう一つは魔導書や魔杖、魔黒石や魔法で属性を付加した武具…  
…魔具と呼ばれる物を触媒に発動させる魔法。

こちらは触媒によってどんな魔法でも使えますが、知識と技能、魔力が必要になりますし、魔力を予め入れておいた魔黒石でも使わない限りは詠唱に長い時間がかかります。

彼の魔法は前者のように思えますし、だとすればやはり代行者という事になります。

が、動きを見るに代行者のレベルとも思えません。

あるいは剣やペンダントが触媒なのでしょうか？

それとも、もしかしてもしかしたら、私を焦らしているのでしょうか？

先程の笑い。きっと彼もこの戦いを悦んでくれているはず。

彼はきつと私と同類なのでしょう。

だとしたら……己に制約か何かを科している？  
そういう楽しみ方もあるという事でしょうか？

いや……そうか、あの呪いの装備。

あれが枷となっているのかもしれないね。

……あれ？ 普通に鎧は脱げてますよね？

……もう止めましょう。

考えてもどうせ答えは出ませんし、他の煩わしい事も考えたくありません。

今は彼だけを見て、存分に彼との一時を楽しみましょう。

素晴らしい！

一瞬の詠唱もなくこんな魔法を使つとなれば、やはり代行者としか思えない！

しかも先程は火の魔法を使ったのに、今度は真逆の氷の魔法だなんて！

面白い！堪らない！斬りたい！

彼を斬りたくて斬りたくて堪らない！

斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい！

否！

事ここに至って、どうして斬らずにおれましょう！

「どうする！ 避けるか！？」

バカな！

こんな物を見せられて避けるなんて、そんな勿体ない事が出来る訳がない！

「笑止！」

アエネアス様、どうか私に彼の全てを受け止める力を！

「……………！」

私は拳を握りしめ、渾身の力で自分の身体よりずっと大きな氷の鳥を殴りつけました。

アエネアス様の力は守護の、守りの力。  
その力を自分に宿して攻めに転じれば、

轟音。

最強の盾となり、最強の鈍器となります。

氷の鳥は大量の輝く結晶となって飛散し、周囲の空間を一瞬で極低温の世界に変えました。

その向こう側、彼が槍を手に、一本の矢となって凄まじい速度で飛来します。

疾い。迎撃が間に合うでしょうか？

そして瞬きも許されぬ一瞬の中で、私は確かに彼の笑顔を視認しました。

自分と同類の存在に初めて出会えて、しかもベルカントを名乗る彼がそうだなんて……！  
なんとという至福！ なんとという快感！

ああ、本当に、本当に ！

「  
「！」



## 第十六話（前書き）

お待たせしてすみません。  
たぶん次は早めに更新できるかと。

## 第十六話

氷霧の向こう側、リーリエ副長が再び構え、迎撃の意思を示す。その姿に傷の類いは一切見えず、氷の猛禽は僅かなダメージも与えられなかったのだらうと判断する。

単純に殴っただけという事は無いだろうが、魔法を使ったのか、何をしたのかは見えなかった。

マーシェニクスが通じるだろうか？

「……………ははっ」

自分の身の程知らずな思考に苦笑する。

先生の足元にも及ばない俺の魔法と、師匠が使っていたというマーシェニクスを比べる事自体がおこがましい。

視界中央、やや上。

彼女の顔には笑みがある。

勝利や余裕のそれではなく、純粋な歓喜の笑み。強い獰猛な笑み。

最初にあった時も、そしてさっき再会した時も綺麗だと思ったが、今の笑顔が一番綺麗だと思う。

そしてなにより眼が良い。

大きく見開かれた、ただ俺を倒す事だけを求めて爛々と輝く碧眼。それは、少なくとも今この瞬間だけは、俺だけを求め欲する眼。

ありがたいな、と思う。

なんせ一生脳裏に焼き付いて付き合う事になるかもしれない彼女の最後の笑顔だ。これが迷いや怯えに雲っついては思い出す度にうんざりする事になる。

心から感謝したい。

笑顔でいてくれて、ありがとう、と。

心から伝えたい。

俺の初めての人になってくれて、ありがとう、と。

心から思う。

ああ、本当に、本当に

「「なんて……………!!」」

右足が床を蹴り砕く。

柄の端を握って引き絞った右手を肩から左に螺子りながら前に突き出し、彼女の握る長剣がブレて不可視となり、

「いい女！」

「素敵なひと殿方！」

銀色の疾槍と剣閃が交錯した。

例えば……そう、例えばの話だ。

愛し合う二人の結婚式で、一番盛り上がる瞬間に突然二人の目の前で生きた豚の腹を裂き、血と臓腑をぶちまけて花嫁の純白のドレスを汚してやったらどうなるだろう？

悲鳴をあげるだろうか？

たぶんあげるだろう。

でもそれより先に、何があつたのか理解できず、一瞬頭の中が真っ白になるんじゃないだろうか？

今の俺達は、まさにそんな感じだった……まあ愛し合つてなければ悲鳴もあげはしないが。

「そこまでだ」

眼前では俺のマーシエニクスとリーリエ副長の長剣が交差し、さらにその上から巨大な鈍色の鈍器によって床に叩きつけられている。

大理石の床は砕けて大きく陥没し、鈍器は深々と突き刺さっていて、きつと手を離しても倒れないだろう。

幾つもの部品で構成され、何故か弦が張られた2メートル近い武器な鈍器。

まさかとは思つが、この鈍器はボウガンの類いなのだろうか？

鈍器を端から端まで観察し、それを握る大きな手に行き着く。

視界を上げれば、そこには見上げる程の巨漢がいた。

身長は低く見ても2メートル半ば、頭の位置が俺より遥かに高く、それだけの高さが有りながら、高さより肩幅の広さや胸板の厚さに目が行く巨漢。

しかも首から上を見れば、総白髪で深い皺が刻まれた浅黒い顔の老人ではないか。

この老人は歳を重ねる毎に成長しているのだろうか？ それとも若い頃はもつとデカかったのだろうか？

いや、或いは鬼人族や亜人種かもしれない。

「ギルド長……………」

ギルド…………長？

リーリエ副長の呟きに思わず眉をしかめる。

ギルド長。

つまりこの老人がネフロの冒険者ギルドの最高責任者という事か。

まあそれはどうでも良い。

問題なのはリーリエ副長の味方が来たという事だ。

どうする。

マーシエニクスはあの鈍器が邪魔だ。

魔法はさっきので消耗し過ぎた。

格闘は勝てる気がしない。

あと残ってるのは…………呪いしか無い。厳しいな。

血は指を噛めば良いが、呪言の時間が致命的だ。

「……………」

ふう、とため息を一つ。

吐く息が白いのは魔法の影響だろう。ようやく寒さに気付いてぶるりと震える。

ちょうどいい、頭を冷やそう。  
落ち着け、落ち着いて考えろ。

どう殺す？

どっちを殺す？

どっちから殺す？

いや、どっちも殺す。

決まりだ。両方とも殺そう。

神像を頼るのは気が進まないが、死体は喋らない。

「……………おお」

いかん、全然落ち着いてないぞ。

「やめておけ小僧。五対一で勝てると思つな」

「五対一？」

「ヒース様はお眠りのようすな」

……………そういう事が。

声のした方へ振り返れば、ヒースの傍にハイデンライク氏と昼間見たシスター、そして二人を庇うように立つ軍服の若い男がいた。

「バカな！ これだけ暴れておいて何の咎も無しなどと、気は確かですか！？」

「咎もなにも、副長であるリーリエが臨時試験だったと言っておる」

「だからその臨時試験などというもの自体、聞いた事がないと……！」

「お主は軍人だ。ギルド職員の規約など知るまい。そしてハイデンライクが試験の場所を提供したと言う以上、お主が口出しする問題ではない」

「従業員が慌てて報告に来た時、ハイデンライク殿は我々と一緒に居たではありませんか！」

「いやはや申し訳ない。私としたことが、従業員に伝えておくのを忘れておりました」

「……………と、言っておるが？」

「~~~~~！！」



……妙な事になった。

あれから大人しくじいさんに従い、ヒースを抱き上げて部屋に戻って寝かせると、空いてる部屋で何故か事情聴取を受ける事になったんだが……。

「彼は悪くありません。あれは臨時試験です」

開始早々リーリエ副長がそう言うて以来、ずっとこんな感じである。

さらにハイデンライク氏がそれに援護射撃をし、老人もならば良しとしたのだが、軍服の男だけが納得できないと騒いでいるという訳だ。

ちなみにシスターはバカ二人の治療に行っているようだ。

「こんな危険な男を野放しにするなど、ニカノール殿もリーリエ殿もどうかしています！ それにレイナード卿とノルバント卿への暴行の件もあります！」

「兄達の事に関してはこちらで調べます。ニグラート殿のお手は煩わせません」

さつきから同じ事の繰り返しである。ぶっっちゃけ飽きた。あ、おわかりください。

「貴様ものんきに茶など飲むな！ ハイデンライク殿も淹れる必要はありません！ クッキーもいいから！」

「まあまあ、ニグラート様も落ち着いてください。これは新しくブレンドしたものでして、なかなかの自信作でございますよ？」

「あら、良い香りだと思ったら新作だったんですね。なんだか得しちゃった気分です」

「ありがとうございます。今回は特別に栽培した薔薇の花弁を混ぜてみました」

「ずずっ……わしはもつと苦い方が好みだ」

「お菓子にも合いますね、これ。蜂蜜とか入れたら子供も好きそう」

「でもミルクは駄目そうですね。匂いがケンカしそうだ。リンゴをすりおろして加えても良いかも」

「おや、ラギウス様もお茶を嗜まれるので？」

「育ての親が趣味で」

「貴様の趣味など聞いてなああああああいつ！…！」

あ、キレた。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「」「」

「……………いや、俺じゃなくて親の趣味ですよ?」

先生がえらく凝ってて、よく腹がたぶたぶになるんだよなあ。

「同じだから!聞いてないから! つーかおかしくね!? なんで皆でお茶飲んでんの!? なんでこんなまつたりしてんの!?!」

なんでって言われても。

あとしゃべり方が変わってる。そっちが地かニグラート。

「お前には聞いてない! つーか呼び捨てすんな!?!」

いかん、口に出してたか。

「まあ勤務時間外だからな」

「恙無く試験に合格したラギウスさんと親睦を深める、という事はダメですか?」

「つつがあつた(?)よね!? リーリエさんのお兄さん怪我してたよね!?!」

どうせさっきのシスターが治療してんだろ。あ、おかわりください。

「だからおかわりすんなー！」

もう何がなんだか。

結局そんなやり取りがシスターが部屋に来るまで続いた。

## 第十六話（後書き）

緊張感が消えてもーた……責任とって死んでもらうかもしれんぞー  
グレート君（え

実験として後半は描写削りまくって会話ばかりにしてみました、  
どんなもんか。

なんで庇われたかは次回をお楽しみに。

## 第十七話（前書き）

お待たせしてすみません、明日には携帯が新しくなるかと。

## 第十七話

「すみませんっ、遅くなりましたあ！」

部屋に入るなり、そのシスターはぺこぺこ頭を下げだした。ゆったりした修道服なので身体付きは分らないが、身長は低く小柄で、幼い顔立ちや大きな瞳がなんとも可愛らしい。小動物のように膝に乗せて撫でまわしたくなる。

「大丈夫です！ どうせまだ大した事は話してませんから！」

口調が戻った軍服が空いていた隣の椅子を引き、にこにここと笑う。よく分らんが忙しい男だ。あと大した事を話してないのはアンタがうるさいからなんだが。

「リーリエさんのお兄様は軽い打ち身くらいでした。お連れの……えっと」

「ノルバント卿ですか？」

「ええ、はい。ノルバント様はひどく錯乱されてましたが、今はお休みになってます」

……きつと怖い夢でも見たんだろう。うん。

「そうでしたか、ありがとうございますファニー」

「いえ、そんな……あ、すみません、いただきます」

ファニーと呼ばれたシスターはハイデンライク氏からカップを受け取り、ふくふくと冷まして両手で持ってごくごくと飲む。

……くそ、可愛いじゃないかこの小動物め。

「……………あ」

リトルアニモーは俺の視線に気付いたのか、こちらをチラリと見てそのまま数秒固まると、顔を真っ赤にして、あわあわとお茶を置いてぺこぺこ頭を下げだした。

「すすすす、すみません、わたしっいたらはしたないっ！ わ、わたしっ、ファニール・ドープラウンと申しまふっ、申しまふっ！」

……………可愛いなあアニモー。

「癒しの神キュレイ様に仕える身ではありませんが、ギルドと軍の方々のお手伝いをさせて頂いています。よろしく願います！」

お手伝い、か。具体的な事は分からないが、昼間に見た限りでは警備兵の様だったな。バカ二人の治療もそうだが、癒しの神に仕えるくらいだからきっと治療や回復魔法が得意なのだろう。

「ああ、俺はラギウス・ベル」

「貴様の名前などどうでも良い！」



俺が名乗っている最中に軍服が突然大声をあげる。  
いちいち何が気に入らないんだか。

「例え試験だろうと、貴様がバズワルド卿やノルバント卿に暴行を加わえたのは確かなのだ！　ただで済むと思うなよ！？」

……出たよ。出ましたよ。またこれだ。

今日接してわかったが、貴族って奴は何かと言つと、ただで済むと思うなと叫ぶ。

バカの一つ覚え……いや、コイツ貴族なのか？

可哀想に、アニメーが困ってるじゃないか。

「なあ？　ちよつと聞きたいんだけど良いか？」

「貴様、自分の立場が分かっているのか？　質問する権利」

「あんた貴族？　貴族の男ってバカしかいないのか？」

「ばっ……！？」

「ただで済むと思うな、下民のくせに、それ言ってるだけで贅沢できるんだから、貴族様って気楽だよな」

「ご先祖様辺りが功績を立てたのか金で買ったのかは知らないが、その当時はともかく、何世代かすれば贅沢が当たり前前のバカしか育たなくなるという事だろうか？」

「貴様……っ」

「ただで済まさないんだつたら、今ここでなんとかしろよ。後でパパに言わなきゃケンカも出来ないのか？」

ただで済むと思うなよって事は、後で復讐してやるぞって事だ。

不敬罪だのなんだので捕らえるのか、金でゴロツキを雇うのかは知らないが、それが貴族の力と考えれば別に悪くはない。

だが相手を目の前にして口にするのはバカとしか言い様がない。

本当にただで済まさないなら、何も言わないで逃げて追っ手を放てばいい。

そうでないなら、相手の前で口にするなら、それこそ復讐を恐れた相手に殺されても文句は言えない。

『後で復讐してやるぞ』と言う相手を、自分の命を狙う相手を見逃すバカが何処にいる。

それが理解できない貴族のバカ共は、そう言えば相手が怯むとも思っているのだろうか。

度し難い。

まさか自分は死なないとも思ってるのだろうか？

家から数分も歩けば獣や魔物、あるいはそれらの死骸が見つかるこの世界で、自分だけは死なないか？

そんな益体も無い事を考えていると、軍服が腰の剣に手を掛ける。

「……………吐いた唾は飲めんぞ」

「いやいやいや、そんな事はないさ。アンタが這いつくばれば舐め取れる」

これだけ時間があれば充分だ。

軍服がどれくらい強いのかは知らないが、リーリエ副長ぐらいの剣速でなければ問題はない。

問題があるとすれば、球体に練った魔力を直接叩きつけて吹き飛ばすか、光線にして風穴を空けるかのどちらかだが……………光線の方が速いから風穴か。

リーリエ副長とギルド長のじいさんは邪魔する様子は無いし、ハイデンライク氏は何を考えているのか分からない微笑みを浮かべている。

「ああ、気にせず先に抜いてくれ。座って待っててやるから」

先に当てるのは諦めてもらおうけどな。

「なっ…る…なよっ」

「ん〜?」

「舐めるなよ貴様ア!!」

怒号と同時に軍服が剣を抜く。そのまま一撃を見舞うつもりのだが、残念ながらその動きはリーリエ副長とは比べるのもアホくさ

い程に遅い。

俺は苦笑を浮かべながら、軍服の胸に掌を向けた。

「ケンカはやめてください！」

俺の魔法と軍服の剣を止めたのは意外にも、大人しそうなアニメ……ファニエールの叫びだった。

「どうしてケンカなんかしちゃうんですか！？ もうお二人はギルドと軍のお仲間じゃないですか！」

「ファニエールさん、これは……」

「ニグライトさんだって、今がどんな時か分かってるはずですよ。いまはお仲間同士でケンカしてる場合じゃないはずですよ」

「……すみません」

ギルドと軍は知らんが俺とコイツは間違いなく仲間じゃないぞ、とツッコミそうなのをなんとか我慢した。

って言うか本当にさっきから何なんだ、こんな時とかどんな時と  
かって。

「ニカノール様」

ファニエールがギルド長を見、ギルド長がため息を吐く。  
なんともやる気の感じない、呆れたような、面倒臭いようなため息だ。

「ニグラート。話が進まんから、お前はもう帰れ」

「は？ な、何故ですか……？」

軍服がギルド長の言葉に困惑する。  
当たり前だろ。ぎゃあぎゃあ騒ぎやがって。

「試験は合格だが、わしはまだ小僧の事を知らん。リーリエが臨時試験をするくらいだ、それ相応の理由があるう。だから特別に面接をする」

「ならば私も!!」

「ギルドと関係の無い者を立ち会わせる訳にはいかん」

「そんな!？ ならハイデンライク殿はどうなるのです!」

「ハイデンライクは以前ギルドに所属していたし、今は協力者だ。問題ない。ファニエールも軍とギルドの両方と協力関係にあるのは知っておろう。二人ともそれなりの権限を持っている。聞き分ける」

「くっ……ですが、この男は危険です! リーリエ殿を殺そうとし

ていたではありませんか！」

「試験だったと言っておる。それに、ここにお前より弱い者はおらん」

「ギルド長、少しお言葉が……………」

ギルド長の容赦ない言葉にリーリエ副長が気まずそうに制止する。ハイデンライク氏は感情の読めない顔でお茶を飲み、アニモーはさっきの勢いはどうしたのか、困った顔でオロオロするばかりだ。

と言うかアニモーはこの軍服より強いのか。

「……………分かりました」

軍服はそれだけ言って立ち上がり、俺を殺意すら孕んだ眼で睨むと、肩を怒らせて足音も荒く部屋を出ていった。

「小僧」

軍服が出て行った途端、ギルド長のじいさんがぐいっとお茶を飲み干し、俺をギロリと睨む。

こんな巨漢に睨まれるというのは、なんとも居心地が悪い。

「当たり前だが、お前を庇ったのには理由がある」

まあそんなのは分かってる。

ついでに言えば、ギルドも軍も国や王に仕える立場なのだろうが、考え方ややり方が違い、各々に思惑が有るのだろう。

軍服に対する、アニメー以外のわざと怒らせるような態度からも間違いない。

そして多分……こいつらは俺を利用しようとしている。

「北のザブツベルクは知っているな？」

「知識としては」

嫌々な予感がするね。

軍やギルドに関わる人間から『こんな時』とかその類いの事を何度も聞いて、ギルド長の口から隣国の名前が出て、軍のバカは俺を糾弾したのにギルドは俺を庇った。

考えられる可能性は幾つか有るが、恐らく……。

「数時間前、ザブツベルクがこのサザンフィードに宣戦布告した」

そら来た面倒臭え。

「つまりギルドに所属する者の義務として戦争に参加しろ?」

俺の言葉にギルド長が頷く。

「正確に言えば、わしらが参加するのは国境の砦や、このネフロでの防衛戦だけだ。攻めは軍や騎士団に任せる事になる」

「……………ふーむ」

まいったね。面倒なタイミングで仕掛けてきたもんだ。あと一日か二日遅ければ家に帰れただろうに。

……………どうしたものか。

将来傭兵になる以上、戦の経験はプラスにはなってもマイナスにはならないだろう。だが今回の戦争……………防衛戦で得られる経験はギルドの冒険者や兵士として生きていくにはプラスかもしれないが、傭兵としてはどうだろう。

戦う術や知識は有っても、傭兵としてどう考え、どう動けば良いかはまだ教えてもらっていない。

何も知らずに命令に従って犬死になんて御免だ。なにより知らない人間にばかり囲まれて戦う事には不安もある。



「……それでさっきのを試験と言った訳だ」

軍のバカに始末されるより、一人でもギルドの戦力になるなら加えるべきだと考えたのだろう。

「ラギウスさんには申し訳ないと思っておりますが、どうかお願いします。既に軍が先行して砦に向かっています。王都や他の所からの援軍が到着するには時間がかかります。それまで国境を守り、万が一国境を突破されれば、このネフロを守らなくてはなりません」

「なるほど……」

リーリエ副長の言葉に、思わず口元に手を当てて考える。

正直に言ってしまったえば、国も国境もネフロもどうなるかと知った事ではない。しかし家に近いネフロが戦火に晒されるのは好ましくないようにも思える。

「ちなみに、もし断ったら？」

「正式に試験を受けた訳ではないですし、断るのは可能ですが、あまりお勧めは出来ません」

「可能なのに？」

「はい、今後この国でギルド登録できなくなりますし、なにより……」

リーリエ副長が言いにくそうに言葉を句切り、ハイデンライク氏に視線を向ける。

「先の一件がギルドとは無関係の私闘となると、カフェの修繕費を請求させて頂く事になりますなあ。もちろんヒース様にも……」  
なるほど、実に分かりやすい話だ。

「具体的には？」

「まあ、大雑把にお一人辺り竜貨二枚程と思って頂ければ。もちろん今ここに居ないお二人やリーリエ様にも請求致しますが」

値段を聞いてアニモーがひいっと声をあげる。

しかし酷いぼったくりだ。部屋の値段といい、今回の事といい、このホテルは本当は後ろ暗い事ばかりしてるんじゃないだろうか。

「ラギウス様は良いかもしれませんが、ヒース様は戦場に駆け出される上に、莫大な借金を背負う事になりますな」

そう言ってほっほっほっと笑い、カップに口をつける。

ほっほっほっ、じゃねーよクソじじい。

「たった一人を戦場に送るために、随分と金をかけるもんだ」

「代行者の力はそれだけの価値がありますから。ラギウスさん、お力を貸して頂けませんか？」

……待て、なんでリーリエ副長が俺が代行者かもしれないと知って……そうか、ハイデンライク氏か。

まあハイデンライク氏は元々向こう側の人間だし、気になる事があれば伝えるだろう。

「はて？ ラギウス様、私は告げ口など致しておりませんよ？」

俺の視線に気付いたハイデンライク氏が楽しげに告げる。

「ついさっき嘘を吐くの見てるもので」

「ほっほっほっ。これはこれは、説得力がありませんでしたかな…  
…しかし言っただけですよ？ 神像には強い魔力が宿り、魔力を感じ  
知できる者であれば、一目でわかるものと」

そういえば言ってたな。つまり神像をもっている限り、看板を提  
げてるのと同じって訳だ。

「ましてや、ここには代行者しか居ないのでから」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8081x/>

---

傭兵の代行者

2011年12月26日00時24分発行